

出島山下貝塚

宮城県牡鹿郡安川町出島字寺間

第四次調査概況報告書

1973

出島山下貝塚第四次調査概況報告書

目 次

緒 言	(1)
I 出島の現況と遺跡の位置	(1)
II 本貝塚発見の動機	(2)
III 調 査 の 経 過	(2)
IV 各トレンチの層序と出土品	(6)
1. №Ⅺトレンチの層序と出土品	(6)
① №Ⅺトレンチの層序	(6)
② 出 土 品	(6)
A 自 然 遺 物	(6)
B 土 製 品	(8)
C 石 製 品	(8)
D 骨 角 製 品	(9)
E 貝 製 品	(10)
2. №Ⅻトレンチの層序と出土品	(10)
① №Ⅻトレンチの層序	(10)
② 出 土 品	(12)
A 自 然 遺 物	(12)
B 土 製 品	(12)
C 石 製 品	(12)
D 骨 角 製 品	(13)
E そ の 他	(13)
3. №Ⅼトレンチの層序と出土品	(13)
① №Ⅼトレンチの層序	(13)
② 出 土 品	(16)
A 自 然 遺 物	(16)
B 土 製 品	(16)
C 石 製 品	(17)
D 骨 角 製 品	(19)
E 貝 製 品	(22)
4. 表 土 採 集 品	(23)
V 考 察	(24)
土器について	(24)
筥状骨角器について	(27)
錨形釣針について	(29)
結 言	(34)

写 真 ・ 図 版 目 録

- 第 1 図 洋上より貝塚を望む
- 第 2 図 XI トレンチ実測図
- 第 3 図 XII トレンチ貝層の一部
- 第 4 図 XII トレンチ実測図
- 第 5 図 XIII トレンチ実測図
- 第 6 図 垂飾具出土状態 (XIII トレンチ)
- 第 7 図 土器出土状態 (XIII トレンチ)
- 第 8 図 骨刀出土状態 (XIII トレンチ)
- 第 9 図 錨形釣針出土遺跡分布図
- 第 10 図 錨形釣針軸部形態模式図
- 第 11 図 出 島 全 図
- 第 12 図 土器拓影 (縄文前期初頭)
- 第 13 図 土器拓影 (縄文前期初頭)
- 第 14 図 土器拓影 (縄文前期初頭、その他)
- 第 15 図 濃霧のなかに、かすむ出島
- 第 16 図 出 島 遺 跡 全 景
- 第 17 図 土器写真 (1 類)
- 第 18 図 土器写真 (2 類 A)
- 第 19 図 土器写真 (2 類 A)
- 第 20 図 土器写真 (2 類 B)
- 第 21 図 土器写真 (3 類 A)
- 第 22 図 土器写真 (3 類 B)
- 第 23 図 土器写真 (4 類 A)
- 第 24 図 土器写真 (4 類 A)
- 第 25 図 土器写真 (4 類 B)
- 第 26 図 土器写真 (5 類)
- 第 27 図 土器写真 (6 類)
- 第 28 図 土器写真 (7 類)
- 第 29 図 土器写真 (8 類)
- 第 30 図 土器写真 (9 類)
- 第 31 図 土器写真 (10 類)
- 第 32 図 朱 彩 され た 土 器 群

- 第33図 縄文前期初頭の土器群
- 第34図 土器片再製土板
- 第35図 土製耳飾
- 第36図 石斧
- 第37図 石鏃・石錐・石匙
- 第38図 軽石製浮子・砥石?
- 第39図 方孔石
- 第40図 円孔石
- 第41図 凹石
- 第42図 石棒・石製垂飾具?等
- 第43図 石劍
- 第44図 石劍破片?・石錘?
- 第45図 匏状骨角器、その他
- 第46図 鹿角製釣針
- 第47図 鹿角製銚頭
- 第48図 骨鏃
- 第49図 骨製針・角製尖頭工具
- 第50図 骨製針
- 第51図 角製髪飾破片・骨製髪飾破片
- 第52図 骨刀
- 第53図 骨製小玉
- 第54図 垂飾具
- 第55図 牙製装身具
- 第56図 骨製耳飾?
- 第57図 垂飾具
- 第58図 貝輪・その他
- 第59図 刺突痕を有するマクロ脊椎骨
- 第60図 炭化物(ウメの種?)
- 第61図 塊状物質(不明)
- 第62図 滑石製護符(第二次調査概況報告書参照)

表 目 録

- 第1表 遺跡別錨形釣針出土数一覧表
- 第2表 錨形釣針関係参考文献一覧表

出島山下貝塚第四次調査概況報告書

—— 宮城県牡鹿郡女川町出島字寺間山下 ——

緒 言

出島の、ほぼ中央部には西方へ向って突出する半島状台地がある。その南斜面には縄文前・中期を中心とする海水産貝塚「余名子館貝塚」がある。この貝塚に対しては昭和24年以来、数次にわたって調査を実施した。その後この台地の、ほぼ中央部を占める平坦面に配石遺構群のあることが判明したので昭和35年より同39年に至る間、夏季休業を利用して調査を行なった。

更に昭和44年に至り、本台地の北側急斜面において縄文時代後期初頭を中心とする「出島山下貝塚」の存在が確認されるに至った。本貝塚に対しては昭和45年以来、年次計画に従い、台地の下方より、上方へ向って調査を進めて来たが、本年度の第四次調査においては、ほぼ上方の台地面に至るまで発掘を進め、本貝塚の調査を完了した。明年度は、この台地の南側急斜面に堆積している前述の「余名子館貝塚」に対して前回発掘の不備を補う目的を以て、更に調査を実施する計画である。

I 出島の現況と遺跡の位置

出島は宮城県牡鹿郡女川町の一部に属し、女川港の北東方9.1キロメートルの海上に浮ぶ小島である。(北緯 $38^{\circ}27'15''$ 、東経 $141^{\circ}31'3''$)。本島は南北3.75キロメートル、東西1.5キロメートル、面積2.07平方キロメートルで南北に長い小島である。島内には河川はなく、又高峻な山もない。島全体が山地地形をなしているが、そのうちでも南部は僅かに高く、87.8メートルの標高を示している。本島は概ね古生紀層であり、地質は褐色粘土質土壌で、腐触土は少く、生産性は一般に乏しい。本島の東側は直接太平洋に面し、そのため波浪によって浸蝕された複雑な岩石海岸となり、いわゆるリアス式海岸の様相を呈している。しかし島の西岸は女川湾と雄勝湾によって抱擁され、常に波静かで、恵まれた地形と相俟って出島・寺間等の天然の良港をつくっている。

本島の中央部より、やや南寄りの地点には前述の如く、西側へ向って突出する、地図には現れない程度の半島状台地があるが、本貝塚は海拔28メートルに及ぶ本台地の北側急斜面にある。

II 本貝塚発見の動機

寺間において水産加工業を営む阿部八治郎氏は、この地に水産加工所を設立するため、1969（昭和44）年、海岸付近の一部を掘り崩して、地ならしを行ない、敷地の造成に着手したが、その際、海岸付近の随所から縄文土器片・貝殻等が発見され、俄かに人々の注目を集めることとなった。宮城県小牛田農林高等学校郷土研究班では数次にわたる踏査を行ない、本貝塚の所在を確認するに至った。

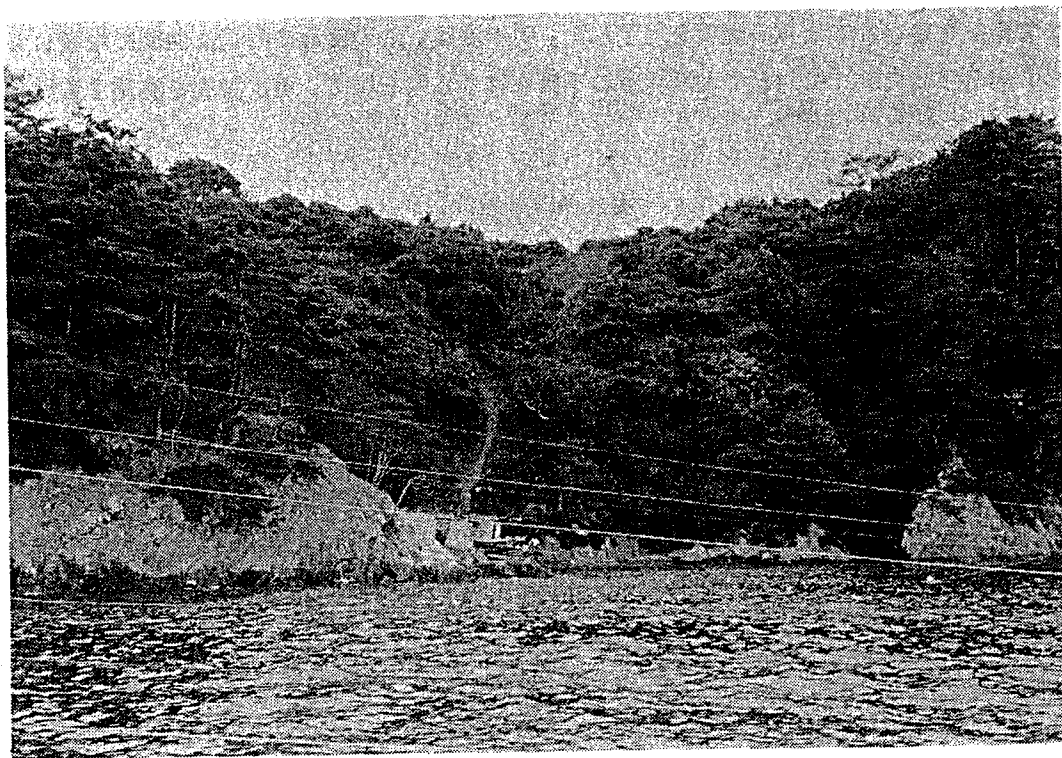
尙出島の現況・遺跡の位置・本貝塚発見の動機等については拙稿「出島遺跡第I輯」、「出島山下貝塚第一、二次調査概況報告書」にも記載しているので、本稿においてはこの程度の記載にとどめておく。

III 調査の経過

発掘調査は昭和48年7月23日（月）より、同31日（火）に至る9日間の予定を以て実施した。

7月23日（月）曇（第1日）

本日の発掘調査参加者は9名。（宮城県小牛田農林高等学校郷土研究班員7名、国学院大学文学部学生1名、筆者）。



第1図 洋上より貝塚を望む

一行は午前7時17分小牛田発、現地へ向う。台風7号は熱帯性低気圧となり、益々その勢力を減じて行ったが、海上には、うねりが残り女川、出島間を連絡する巡航船の動揺は平常より激しかった。午前10時、寺間港到着、合宿に要する諸資材を整え、再び小型船にて、遺跡に程近い合宿所へ向う。合宿に関する一切の準備を完了し、午後1時30分、作業に着手した。先ず約50°の急勾配を示す傾斜面に密生している雑木雑草をなぎ払い、諸所に階段状の足場をつくって、登はんの為のルートを切り開いた。今年度は、昨年度調査を実施したXトレンチを更に南方(上方)へ延長する計画である。従ってXトレンチに接続して、各々1.5メートル×1.5メートルのXI・XIIトレンチを設定した。この両トレンチの設定により、トレンチは、いよいよ斜面の最上部に到達することとなった。更に昨年度調査を実施したVII・IX・Xトレンチの東側に接続して巾1.5メートル、長さ4.5メートルのXIIIトレンチを設定した。この地点には可成り有望な貝層の堆積が予想されたからである。(XIIIトレンチは発掘作業の都合上、南北2区に区分し各々別個に調査を実施した。)本日は、これらトレンチの区画、縄張り作業を行ない、明日以降の発掘調査に備えた。午後5時30分作業を打切る。

夜、テレビにより、ドバイ空港における日航機ハイジャック事件、未解決とのニュースを聞く。

7月24日(火)晴 (第2日)

終日好天続く。しかし気温は上昇せず、作業には好適な状態が続いた。

本日はXI並にXIIIトレンチ北区の発掘に着手した。

XIトレンチにおいては約1.25メートルに及ぶ表土の除去作業に着手した。貝殻はなく、僅かに土器片若干が発見されたに過ぎない。しかし、この作業には不慣れな作業員を配当したため、余りにも慎重を期し過ぎ、思わぬ長時間を費消することとなった。やがて正午近く、表土の下方に接続する炭化物混入層に進入したが、土器片の埋蔵は次第にその量を増して来た。又発掘が進むに従い炭化物の混入も、めだって来るが、貝殻は、まれに発見されたに過ぎない。午後2時30分頃より炭化物混入層の下方に堆積している混貝土層の発掘に着手したが、錨形釣針・鹿角製鉗頭・石錐・石鏃等実に多種類にわたる遺物が発見された。

XIIIトレンチ北区においては、1.40メートルの厚さを有する表土の除去作業が行なわれたが、若干の塊石類と共に土器片がまばらに発見されたに過ぎない。午前10時頃、表土の下方に堆積している混貝土層に進入したが、土製耳飾をはじめ刺突痕のあるマグロの脊椎骨及び石鏃等が発見された。この層には多数の貴重遺物が含まれていると考えられたので慎重に発掘を進めるよう注意を促した。本日はXI・XIII両トレンチとも、混貝土層の半ばまで発掘を進めて、午後6時過ぎ作業を打切った。

7月25日(水)晴 (第3日)

予報の通り夏型の気圧配置となり、終日快晴、高温続く。午前8時20分より昨日に引続きXI・XIIIトレンチ北区の発掘を行なう。

XIトレンチにおいては、混貝土層の発掘を継続したが、カキ・アワビ・レイシ・クボガイ・シウリ・ミガキボラ・鹿骨・鹿角等の自然遺物と共に土器小片・方孔石・石製垂飾具・石鏃・鹿角

製釣針・堅果植物の種子等が発見された。尚この層の、ところどころには炭化物が意外に多く含まれていた。本層は厚いらしく、本日は、この層の発掘に終始した。

XII トレンチ北区においても混貝土層の発掘を継続した。カキ・アワビ・シウリ・サルボウ・ミガキボラ・レイシ・アサリ・フジツボ・魚骨・獣骨片・炭化物等の自然遺物と共に土器片・石鏃・石錐・石製小板・骨製垂飾具・骨製針・土器片再製土板等が出土したが、この層の下方には一部に混貝土層と見られる部分がある。この両層の接する付近には特に多くの遺物が埋蔵されていたようである。この層も厚いらしく、堆積は更に続くものと見られる。午後6時30分、本日の作業を打切る。

7月26日(木)晴 (第4日)

昨日より更に暑さを増し、炎天下の発掘作業となる。引続きXI・XII トレンチ北区の発掘を行なう。

XI トレンチにおいては混貝土層の発掘を続行したが、前日同様の自然遺物・土器片のほか、石錐・方孔石・筥状骨角器・同小玉・同髪飾・土器片再製土板・貝輪等が出土した。しかし下方に向うに従い土色は黒色味を増し、自然遺物並に人工遺物の埋蔵量は、いよいよ少くなる。まばらに土器小片と貝殻細片が発見される程度となる。更に下方に及ぶと黄色土塊の混濁する黒色土層が見られるが遺物の発見は殆ど皆無の状態となる。やがて黄色土塊の混入度が益々多くなり、そのまま地山へ移行している。

XII トレンチ北区においても昨日に引続き混貝土層の発掘を続行したが、自然遺物・土器片等のほか、石鏃・方孔石・軽石製浮子・牙製腕飾・骨製小玉・同筥・貝輪等が発見された。混貝土層は遺物の埋蔵量を漸減しながら、黄色土塊混入層へと続いているが、暑熱に悩まされながらも発掘を続行し、やがて地山に到達した。この層は厚く、予想に反し、発掘には長時間を費消しなければならなかったが、その割に遺物の埋蔵量は少なかった。午後6時15分作業を打切る。

7月27日(金)晴 (第5日)

学校行事の都合により2名が帰校し、新たに1名が加わって発掘参加者は計8名となる。

午前8時20分、作業を開始、昨日発掘を終了したXIトレンチ並にXII トレンチ北区の実測及び撮影を行なう。引続き午前10時よりXIトレンチの南側に接続して設定したXII トレンチ並にXII トレンチ北区に隣接する同南区の発掘に着手した。土器小片その他2～3の遺物を拾集しながら約1メートルの厚さを有する表土の除去を行ない、午後1時作業を終了した。午後はレクリエーションが予定されている。生徒一同作業衣より晴着に着替え、女川町夏祭の一環として行なわれる花火大会観賞のため、特別仕立の漁船金毘羅丸に便乗して夕刻女川へ向う。

7月28日(土)晴 (第6日)

本日生徒4名到着、発掘参加者は計12名となる。昨日、表土を除去したXII トレンチ並にXII トレンチ南区の発掘調査を続行した。両トレンチとも混貝土層に進入したが、土器片の出土は、まばらで過去3年間に調査を行なった、傾斜面下方の各トレンチに比較すれば、その出土量は少量といわざるを得なかった。XII トレンチ 南区においては午後3時頃混貝土層に進入したが、XII トレ

ンチにおいては厚い混貝土層の追究に終始した。午後5時45分作業を打切る。

7月29日(日)晴 (第7日)

生徒1名来島、本日の発掘参加者は計13名となる。午前8時20分作業開始、ⅩⅢトレンチにおいては前日に引続き混貝土層の発掘を継続したが、やがて、その下方に接続する純貝層に進入した。本層においてはカキ・アワビ・シウリ・スガイ・クボガイ等が細片状となって堆積していた。土器の出土量は少なかったが、破片には比較的大型のものが多かった。しかも、これらの土器片は羽状縄文を有し、繊維を含入する等前期の特徴を示しているものが多かった。更に、これらの中には尖底部破片1点も含まれていた。本貝塚において、これまでに発見された前期の土器片は4~5点位ある。これらは、いずれも小片で後期の土器片の中に混入していたが、出土量も従来よりは多く、層位的にも明瞭に区分し得たのは今回が最初である。尚本層においては骨角器・石器類の出土は皆無であった。自然遺物も前述の貝殻片を除けば僅かに鹿角片1点が発見されたに過ぎない。やがて発掘は黄色土小塊の混入する黒色土層中へ及んだが遺物の発見は皆無に等しかった。間もなく地山に到達し、午後4時30分、本トレンチの発掘を完了した。

ⅩⅢトレンチにおいては前日に引続き混貝土層の発掘を継続した。この層においても貝類はカキ・アワビ・レイシ・シウリ等が主で、いずれも細片状となり黒色土と混淆していた。土器片は比較的大型で、出土量も前述のⅩⅢトレンチを凌駕していた。この層から発見された土器以外の遺物は鹿角製銚・骨製針・鯨骨製骨刀・魚骨製耳飾・石剣・石棒・カキ殻製貝輪等である。発掘は間もなく黄色土塊の混入する黒色土層へ及んだが遺物の発見は稀である。予想に反し、本トレンチの発掘には長時間を要したが、ようやく地山に到達し、午後6時30分、発掘を完了した。

本トレンチ付近には縄文時代さながらの自然環境が残っていた。終日耳を楽しませて呉れたウグイスの美声や当地名物のウミネコ(カモノ)の乱舞など、実に素晴しかった。又夕暮を告げるヒグラシの合唱も忘れ難い。出島山下貝塚は実に美しい環境の中に残されていた。

7月30日(月)晴 (第8日)

国家試験受験生徒1名帰校し、本日の作業員は12名となる。

午前8時30分より宿舍内に出土品類を展示し、説明会を催した。説明会終了後、ⅩⅢトレンチ並にⅩⅣトレンチ南区の実測並に撮影を行なう。午後は作業員を2箇班に分け、1箇班には土器類その他の洗浄並に梱包を行なわせた。他の1箇班にはトレンチの埋戻し作業に当らせた。復旧作業終了後、出島山下貝塚発掘調査終了を記念して、現地に樹種不明の小樹木5本を植樹し、本貝塚の発掘調査にかかる一切の作業を終了した。夜は海岸付近でキャンプファイヤーを囲みながら合唱放歌し、出島最後の夜を楽しむ。

7月31日(火)晴 (第9日)

朝食後、出土品の梱包、器具器材の整備、点検並に宿舍内外の清掃を行なう。

午後1時、同島寺間在住の阿部健氏提供による金毘羅丸にて出島発、帰校の途に着く。

IV 各トレンチの層序と出土品

1. №XIトレンチの層序と出土品

① №XIトレンチの層序

本トレンチは昨年度調査を実施した№Xトレンチの南側に接続して設定された1.5メートル×1.5メートルの面積を有するもので、標高約29メートルの台地急斜面に位置している。層は3層に区分される。すなわち表土は約1.25メートルの厚さを有し、貝殻・獣骨等の自然遺物はなく、若干の塊石類と黄色土小塊及び炭化物小片が混入している。人工遺物としては土器片がまばらに発見される程度で、層全体が茶褐色を呈している。尙この層の下方部には約50センチの深さで、比較的大型の炭化物と黄色土塊を含み、貝殻片の発見は、まれであるが、土器片を多く埋蔵している部分がある。一応炭化物混入層と見たいところであるが、しかし、それ程明瞭に他と区分出来るわけではないから、本稿においてはこの部分も表土に含めて取扱うこととした。

本層は斜面の上方に畑地が開墾される際、塊石類と共に大量に土砂が崩落し、そのまま堆積したものと思われる。その時期は徳川時代末期であろうと島民は伝えている。

表土の下方には混貝土層がある。約80センチの厚さを有し、貝殻は細片状又は粉状となって堆積しているが、随所に大型の貝殻も多数混入している。

又層全体に炭化物小片を含み、土器・石器・骨角器等も多数埋蔵されていた。層は全般に黒色味を帯びている。尙、この層の、ほぼ中間には15～16センチの厚さで、やや密な貝殻の堆積を示す部分がある。しかし途中で切れ、消滅している。

混貝土層の下方に接続して黄色土小塊混入層がある。20～40センチの厚さを有し、層全体が黒色味を帯びている。この層は自然遺物・人工遺物とも皆無で、そのまま地山へ移行している。

② 出土品

A 自然遺物

a 貝類

カキ アワビ ムラサキインコ レイシ クボガイ アサリ ハマグリ フジツボ、
オオガイ ヒオウギ

b 哺乳類

シカ クジラ イノシシ オットセイ

c 魚類

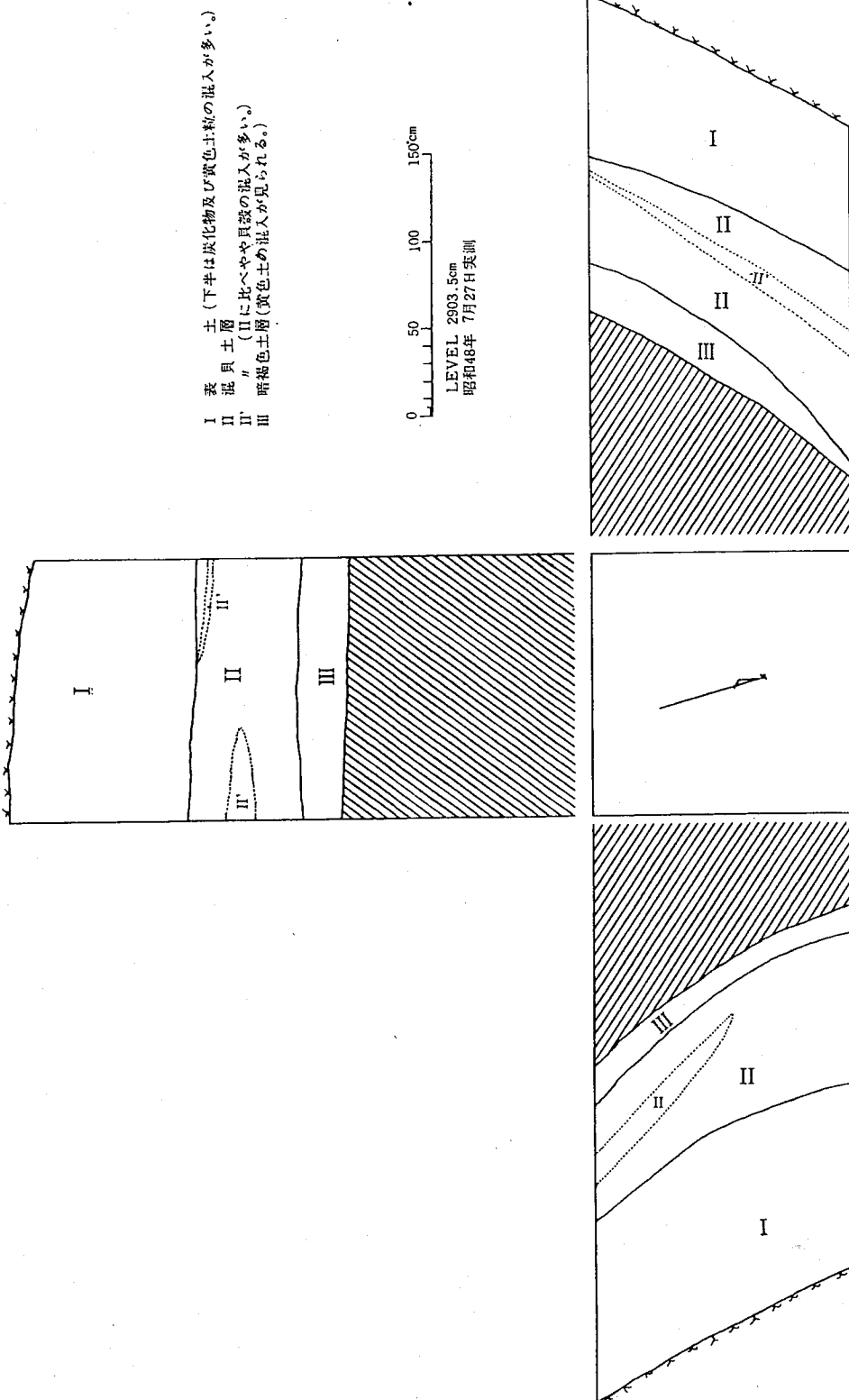
マグロ カツオ マダイ カンダイ スズキ ブリ

d 鳥類

キジ アホウドリ ウミガラス ヒメウ

e 炭化物(ウメの種 1.4 cm×1.5 cm)

第2図 XI トレンチ実測図



B 土 製 品

a 土 器

(V 考察の項参照)

b 土器片再製土板(第34図)

ここにいう土器片再製土板とは土器片の周囲を打ち欠き、更に研磨して径3.5センチ位の円板状に加工したものをいう。これらの再製品には大小の差は多少あるが、ほぼ同大といってよく、規格性が見られる。中には糸かけ様の刻みを付しているものもあるので土錘とする説もある。本貝塚においては昨年度42点、本年度は69点発見されている。(詳細は拙稿「出島山下貝塚第三次調査概況報告書」……V 考察 2参照)

C 石 製 品

a 石 鏃(第37図4)

長さ3センチのチャート製石鏃で、基部には抉入があり、側縁は鋸齒状に加工されている。全体が細長で扁平である。

b 石 鏃(第37図5)

長さ2.9センチのスレート製石鏃で、前者同様基部には抉入があり、側縁は鋸齒状に加工されている。つくりは全般に入念である。全体が細長で、前者より更に扁平である。

c 石 鏃 破 片(第37図2)

現在における長さ1.5センチのスレート製石鏃の破片である。形態その他の特徴は前者同様であろう。

d 石 鏃(第37図10)

長さ2.9センチのサヌカイト製石鏃で、両面を加工し、中高である。全体が細長で、側縁は鋸齒状に加工され、基部には抉入がある。

e 石 錐(第37図13)

全長3.3センチ、柄部の長さ1.7センチ、同巾1.85センチのチャート製石錐である。先端部が僅かに欠損している。

f 石 錐(第37図11)

全長約3.95センチ、柄部の長さ9ミリ、同巾1センチのサヌカイト製石錐で、片面の中央部には特にめだつ稜が通っている。先端部が僅かに欠損している。

g 石匙柄部破片(第37図17)

長さ約1.2センチのチャート製石匙の柄部破片である。小破片のため詳細は不明である。

h 凹 石(第41図3)

1.8センチ×8.5センチ×3.6センチの砂岩の自然石を利用したもので、片面のほぼ中央部に1箇の深い凹がある。

i 石製垂飾具(?) (第42図3)

長さ3.5センチ、上部巾1.95センチ、下部の巾1.4センチの、ほぼ長楕円状を呈する扁平な石材の上端近くに径2ミリの穿孔がある。孔の周囲には多少の糸擦れの痕跡がある。石製垂飾具であろう。

j 方孔石(15点) (第39図)

径4センチ位の黒色砂質粘板岩の小石で、中央部に6ミリ×7ミリ位の長方形の貫孔がある。これらと同類のものは本島の汀線付近で、しばしば発見される。地学専攻者の教示によれば、これらは自然発生的なものらしいという。しかし、これらが遺跡中から発見される以上、何かの目的に使用されたと見てよいであろう。しかも現在、汀線付近で発見される同類のものは大きさ、形状も種々であるが、遺跡中から発見されるものは径約4センチ位の丸小石であり、又重量も17~18グラムで、殆ど一定している。そこには規格性がある、ほぼ同一規格のものを選定しているように思われる。一種の石錘として使用されたものであろうか。(拙稿「出島山下貝塚第一次調査概況報告書」⑥~⑩方孔石の項を再録)

k 円孔石(3点) (第40図1・2・4)

いずれも長さ7センチ、巾4センチ位の自然石で、1箇所に径8ミリ位の円孔が通っている。これらも自然発生的なもので、現在、本島の汀線付近においても、しばしば発見される。しかし遺跡中から発見される以上、何かの目的に使用されたものであろう。(用途は石錘か?) しかもXIトレンチ出土のものは3点とも、ほぼ、同大で、規格性を狙ったふしもある。

D 骨角製品

a 釣針(第46図2)

長さ4.55センチ、巾1.75センチの鹿角製釣針である。軸部の先端には円形の膨らみをつくり、その直下に糸結着用の深い溝をめぐらしている。曲りの内側は、ほぼ方形で全体がL字状を呈している。外側に逆刺を付している。

b 釣針破片(第46図4)

現在における長さ約3.6センチの鹿角製釣針軸部破片である。詳細は不明であるが形式は前者同様であろう。

c 錨形釣針(第46図1)

長さ3.8センチ、現在における巾1.8センチの鹿角製錨形釣針である。軸部上端に径1.5ミリ位の穿孔がある。一方の針が欠損している。

d 鋸頭(第47図2)

長さ6.8センチ、巾1.7センチの鹿角製鋸頭である。中央部には径2.5ミリの穿孔がある。先端部が僅かに欠損しているが、完形品に近い。

e 筥状骨角器(第45図7)

長さ6.7センチ、巾1.2センチの鹿骨製筥である。先端部には使用痕が認められる。

f 角製尖頭工具(第49図3)

長さ6.5センチ、巾1センチの鹿角製尖頭工具である。基部が僅かに欠損している。

g 骨製小玉(タイの骨瘤?)(第53図1)

径1.6センチの魚骨製小玉で、中央部に径2.5ミリの貫孔がある。一種の垂飾具であろう。

h 髪飾破片(?) (第51図1)

現在における長さ2.9センチの鹿角製髪飾装飾部破片であろう。径1.9センチの、ほぼ円形に近い小円盤から径6ミリ位の2本の併行する細棒が延びていたであろう。小円盤の、ほぼ中央部には径3.5ミリ位の穿孔がある。

E 貝 製 品

a 貝輪破片(第58図4)

内径は、ほぼ4.1センチ位と推定されるカキ殻製貝輪破片である。巾は約1.3センチで研磨の跡が認められる。

b 貝輪破片(第58図3)

巾約1センチのカキ殻製貝輪破片である。小片であるため詳細は不明である。

2. №XIIトレンチの層序と出土品

① №XIIトレンチの層序

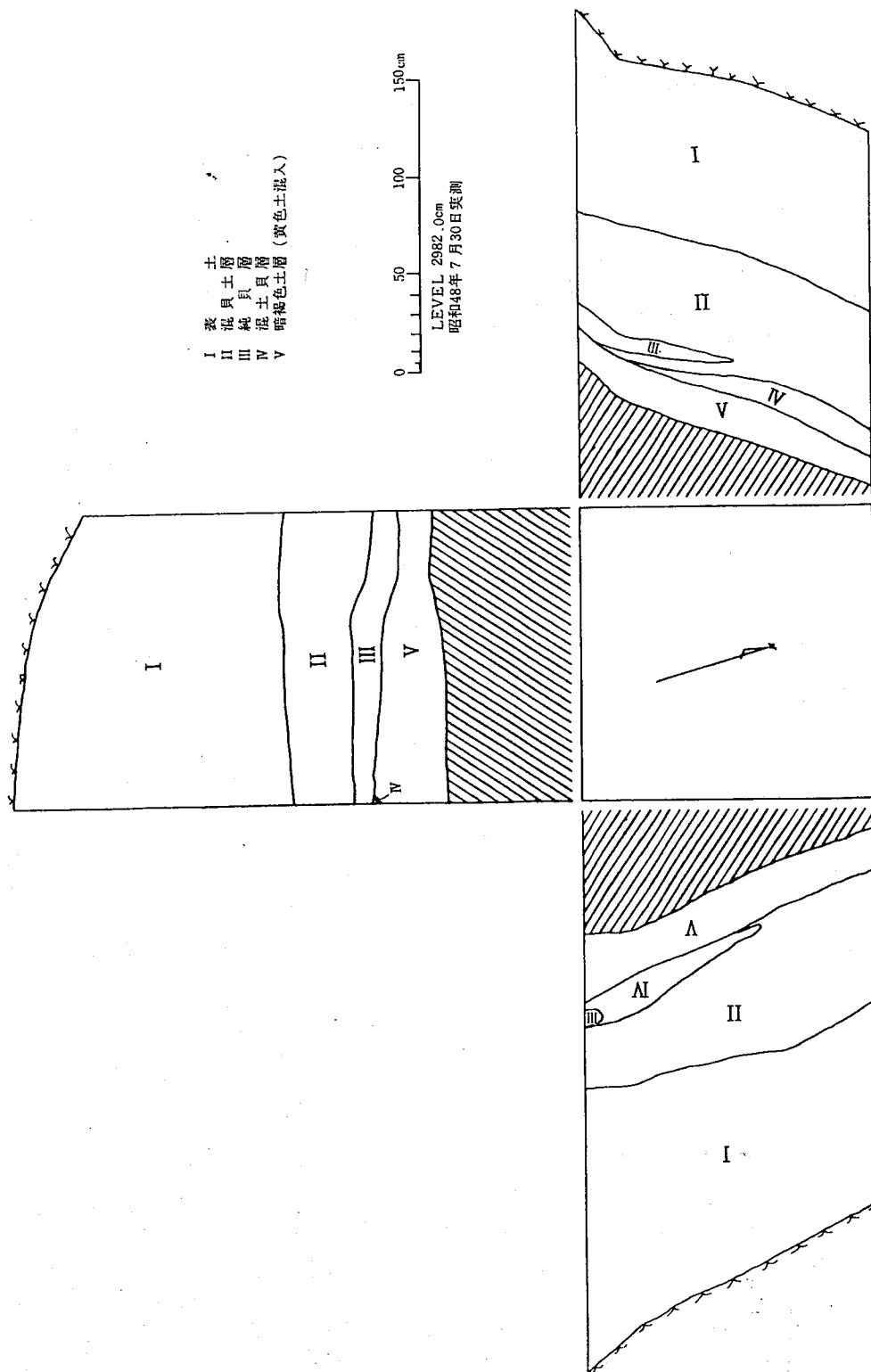
本トレンチは前述の№XIトレンチの南側(上方)に接続して設定された1.5メートル×1.5メートルの面積を有するもので、本トレンチの設定により、本貝塚の発掘調査は、いよいよ斜面の最高所にまで到達することとなった。本トレンチ付近の標高は2.9.8メートルで、広く海洋が見渡せる高所である。

本トレンチは4層に区分される。すなわち表土は約1.40メートルの厚さを有し、層全体が茶褐色を呈している。この層にはマグロの脊椎骨破片及びび形の整った貝殻等が若干含まれていた。又層全体に黄色土小塊及び炭化物小片が混入しているが、本層の下部には約50~60センチの厚さで特に大形の炭化物を多く含んでいる部分が見られた。土器片は層の随



第3図 XIIトレンチ貝層の一部

第4図 XII トレンチ実測図



所から、まばらに発見される程度である。この層は斜面上方に畑地が開墾された際、大量の土砂が崩落し、そのまま堆積したものと見られる。

本層の下方に接続する混貝土層は40～60センチの厚さを有し、カキ・アワビ・ムラサキイノコ・スガイ・クボガイ等が細片状又は粉状となって混入し、層全体が黒色味を帯びている。この層には多数の土器・石器・骨角器類が埋蔵されていた。本層の下方には純貝層が堆積している。約20センチの厚さを有し混貝土層と同種の貝殻が細片状となって堆積しているが、この層の堆積は突き固められたように極めて固い。土器片は比較的大形で、出土量も多く、しかも、すべて縄文前期に属するもののみである。石器・骨角器類の出土は皆無で貝類を除く自然遺物としては僅かに鹿角片1点が発見されたに過ぎない。尚、この貝層は北するに従い、混土貝層に移行している。

本層の下方には黄色土小塊混入層が接続している。20～40センチの厚さを有し、XIトレンチと同様、人工遺物・自然遺物とも全く欠き、やがて地山へ移行している。

② 出土品

A 自然遺物

a 貝類

カキ アワビ ムラサキイノコ レイシ クボガイ アサリ ハマグリ フジツボ
オオガイ ヒオウギ

b 哺乳類

シカ イノシシ クジラ オットセイ

c 魚類

マダイ スズキ カンダイ プリ マグロ カツオ

d 鳥類

キジ アホウドリ ヒメウ ウミガラス

B 土製品

a 土器

(V 考察の項参照)

b 土器片再製土板(第34図)

(拙稿「出島山下貝塚第三次調査概況報告書」………V考察、2及び本稿No.XIトレンチ、B、土製品の項参照)

C 石器製品

a 石匙(第37図15)

長さ6センチ、巾2.1センチ、つまみの高さ0.9センチ、同巾0.9センチのチャート製縦形石匙である。全体が大きく、粗い剝離によって整形され辛じて石匙の形態をつくり出している。即製的に作製された感が深い。

b 石匙(?) (第37図16)

現在における長さ4.6センチ、巾2.4センチの木葉形を呈するチャート製石器破片で、片面のみを加工した粗末なつくりを示している。おそらく縦形石匙で、その柄部を欠損しているのであろう。

c 方孔石(7点)(第39図)

(本稿、№XIトレンチ、石製品……………j方孔石の項参照)

d 石 錘(?) (第44図2)

長さ5.6センチ、巾6.7センチのV字状を呈する自然石で、片面が焼けている。自然石を石錘に転用したものであろうか。

D 骨 角 製 品

a 釣 針(第46図3)

長さ5.4センチ、巾1.9センチの鹿角製釣針である。軸部の先端には円形の膨らみをつくり、その直下には糸結着用の浅い溝をめぐらしている。内側に逆刺を取りつけているが、針先は極めて鋭利である。

b 筥状骨角器(第45図2)

長さ11.6センチ、巾1.4センチの鹿骨製筥である。先端部は著しく磨耗している。

c 筥状骨角器(第45図9)

現在における長さ9.7センチ、巾1.5センチの鹿骨製筥であるが、先端部が約2センチ欠損している。

d 筥状骨角器破片(第45図8)

現在における長さ10.1センチ、巾1.2センチの骨製筥であるが、両端が僅かに欠損している。

e 筥状骨角器(第45図13)

長さ6.1センチ、巾1.3センチの鹿角製筥である。鹿角小片を縦割りにして、先端を加工しているが、著しく磨耗している。基部には截断痕が残っている。

E その他(第61図)

大人の、てのひらにのる程度の薄い、茶褐色を呈する塊状物質で、約40グラムの重量がある。鉄鉱石が分解したものか、正確なことは不明である。

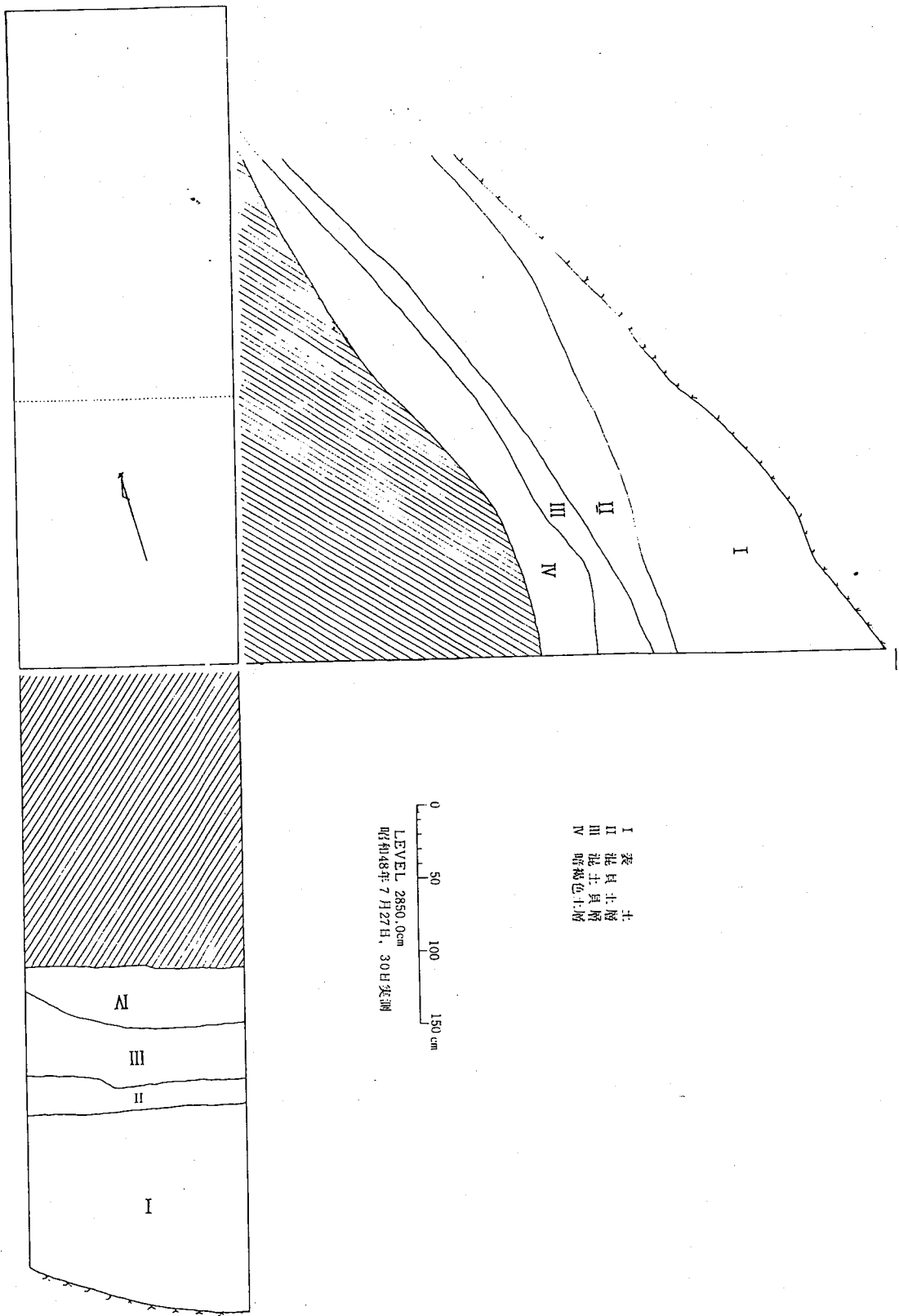
3 №XIIIトレンチの層序と出土品

① №XIIIトレンチの層序

本トレンチは昨年度調査を実施したVIII・IX・Xトレンチの東側に接続して設定された1.5メートル×4.5メートルの面積を有するもので、約28.4メートルの標高を示す、台地の急斜面にある。

本トレンチは4層に区分される。表土は約1.40メートルの厚さを有し、層全体が茶褐色で、随所に大小の塊石を挟んでいる。貝殻はなく、層全体に黄色土塊と炭化物小片が混入し、土器片は、まばらに少量発見されるに過ぎない。本層の下部には約50センチの厚さで、特

第5図 XIIIトレンチ実測図





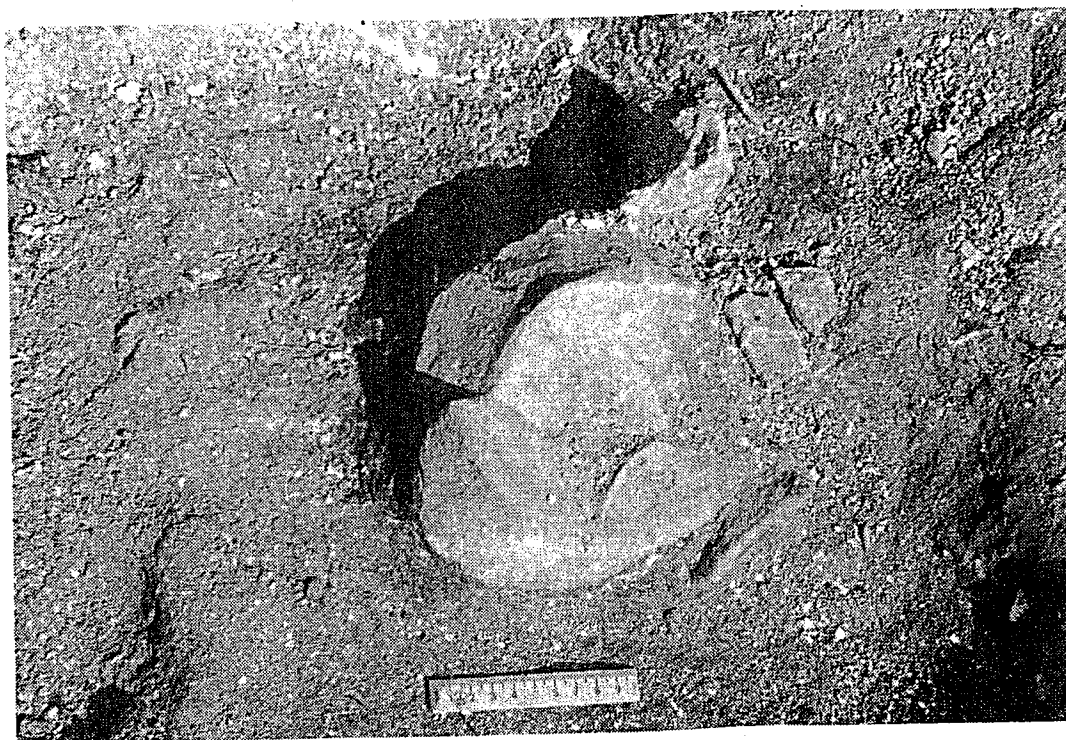
第6図 垂飾具出土状態 (XIII トレンチ)

に大きな炭化物と黄色土塊を含んでいる部分がある。貝殻の発見は、まれであるが、土器片の埋蔵量は意外に多かった。しかし、この部分と表土とは左程明瞭に区分出来るわけではないから、本稿においては、表土の中に含めて取扱うこととした。尚、東壁は北に向うに従い極端に薄くなっているが、これは急傾斜面であるため、土砂が滞留しなかったことによるものであろう。表土は本台地上に畑地が開墾された際、大量の土砂が崩落し、そのまま堆積して生じたものであろう。

表土層の下方に接続している混貝土層は約20センチの厚さを有し、貝殻は細片状又は粉状となって堆積しているが、そのところどころに大型のものも多数含まれていた。又炭化物も多く混入しており、層全体が黒色味を帯びている。又本層とその下方に接続する混土貝層との間には土器・石器・骨角器等が意外に多く埋蔵されていた。

混土貝層は約40センチの厚さを有し、貝殻はすべて細片状となって混入していた。遺物は前述の通り混貝土層と接する付近に多く含まれていたが、その部分を除けば、むしろ少い方である。

混土貝層の下方に続く黄色土塊混入層は40～50センチの厚さを有し、黒色土中に黄色土小塊を多量に含んでいる。自然遺物・人工遺物とも全く欠き、そのまま地山へ移行している。



第7図 土器出土状態 (XIIIトレンチ)

② 出土品

A 自然遺物

a 貝類

カキ アワビ ムラサキインコ レイシ クボガイ アサリ ハマグリ フジツボ オ
オガイ ヒオウギ

b 哺乳類

シカ クジラ イノシシ オットセイ

c 魚類

マグロ カツオ マダイ カンダイ スズキ ブリ

d 鳥類

キジ アホウドリ ウミガラス ヒメウ

B 土製品

a 土器

(V考察の項参照)

b 土製耳飾 (第35図)

径2.4センチ、高さ1.7センチの鼓形を呈する土製耳飾で、中央には径7ミリの孔が通

り、全面に朱彩している。XIII トレンチ 混貝土層出土。

c 土器片再製土板(第34図)

(拙稿「出島山下貝塚第三次調査概況報告書」……V考察2及び本稿No.XI トレンチ B 土製品の項参照)

c 石製品

a 石 鏃(第37図1)

長さ1.75センチの、ほぼ正三角形に近いサヌカイト製石鏃である。全体が肉厚で、基部は、ほぼ直線状を呈し、加工は入念を極めている。

b 石 鏃(第37図3)

長さ2.7センチのサヌカイト製石鏃で、基部には抉入があり、側縁は鋸歯状を呈している。全体が細長で、細密な加工を施している。

c 石 鏃(第37図6)

長さ2.6センチの細身のチャート製石鏃で、ほぼ前者同様の特徴を有するが、一部が僅かに欠損している。

d 石 鏃(第37図7)

長さ2.55センチの黒曜石製石鏃で、基部には抉入があり、細長の形状を示している。本貝塚においては黒曜石製品の出土は極めて、まれであるが、特に黒曜石製石鏃の出土は本貝塚全体で僅かに3~4を数えるに過ぎない。

e 石 鏃(第37図8)

長さ2.9センチのサヌカイト製石鏃で、前述の細長の形状を呈する石鏃群と同様の特徴を示している。

f 石 鏃(?) (第37図9)

長さ2.6センチのサヌカイト薄片であるが随所に加工の跡を僅かに残している。石鏃未完成品と思われるが、判然としない。

g 石 錐(第37図12)

全長3.7センチ、柄部の長さ1.3センチ、同巾1.9センチのサヌカイト製石錐である。先端部が僅かに欠損している。

h 石 錐(第37図14)

全長2.6センチ、柄部の長さ1.4センチ、同巾1.8センチのサヌカイト製石錐である。即製的に作製されたと見られる極めて雑な手法を示している。

i 石 斧 破 片(2点)(第36図3・4)

1点は礫岩製石斧の刃部小破片である。他はスレート製小形石斧の頭頂部小破片である。詳細は不明である。

j 凹 石(第41図2)

長径11.6センチ、短径7.2センチ、厚さ4.4センチの長楕円状を呈する自然石を利用

したもので、片面に3箇所、他の面に2箇所の凹を有する。尚、この凹石の両側面には著しい打痕が見られる。

k 凹 石(第41図1)

長径16センチ、短径5センチ、厚さ3.8センチのペン先状を呈する自然石の表裏面に各々1箇所づつの凹を有する。

l 凹 石(?) (第41図4)

縦12.7センチ、横6.5センチ、高さ2.6センチの、ほぼ長方形を呈する自然石の両面に各々2箇所づつの凹を有する。しかしその埋蔵地は地表面下僅か20センチ付近であり、又すべての面が平らで、この時期の遺物としては余りにも体裁が整い過ぎている。又一面は中くぼみ状に湾曲している。従って本台地上に畑地が開墾された際、砥石の廃品として投棄されたもので、凹と見られるものは偶然生じた瑕疵であることも考えられる。多くの疑念は残るが、一応ここに取りあげておく。

m 軽石製浮子(第38図1)

現在における長さ5.7センチ、巾6センチ、厚さ2センチの扁平な軽石片で、一方の先端が丸く加工され、先端部近くに径4ミリの孔が通っている。元来は長径8センチ位の形の整った長橢円状を呈する軽石製浮子であったと推量される。尚、孔の周囲には糸擦れのあとが認められる。

n 砥 石(?) (第38図2)

縦9.2センチ、横5.5センチの小型軽石を縦割りにして砥石に利用したものであろう。両面には研磨痕が明瞭に残っている。

o 軽石未加工品(第38図3)

大人の拳大の極めて詭い軽石である。未加工品か、或いは耐久性を危んで選定後、放棄したものと思われる。

p 軽石未加工品(第38図4)

小児の拳大で、一部に研磨痕を残す、やや硬質な小軽石片である。未加工品であろう。

q 方孔石(14点)(第39図)

(本稿NoXIトレンチ石製品……j方孔石の項参照)

r 円孔石(3点)(第40図3・6・7)

(本稿NoXIトレンチ石製品……k円孔石の項参照)

s 穿孔を有する石片(第42図1)

長径9.2センチ、短径5.2センチの不整形石片で、1箇の石錐による穿孔が認められる。破片であるため実体は不明である。

t 穿孔を有する小型石片(第42図2)

長径5センチ、短径3.6センチの石製品破片で、1箇の石錐による穿孔がある。(両面から観察すると穿孔には多少の、くい違いがある。)又孔の直下には一条の截痕を施し、更に整形のため全面を研磨した跡も認められる。一種の祭器か、装身具類か判定は困難で

あるが、少くも実用的器具ではないであろう。

u 石 剣(第43図1)

長さ21.2センチ、巾2.7センチ、厚さ1.8センチの凝灰質砂岩の自然石を利用したもので、関部付近には一条の截痕をめぐらしている。柄の部分は幾分細く、丸味を帯び、先端部は、やや扁平で、先尖り状を呈している。柄の一部が欠損している。これは形態の類似した自然石に最少限の加工を施して石剣に見たてたものであろう。

v 石剣破片(?) (第44図1)

現在における長さ8.2センチ、巾2.4センチ、厚さ1.3センチの凝灰質砂岩で、全面に研磨痕が認められる。石剣の柄の部分と認められるが、確言は出来ない。

w 石 剣(?) (第43図2)

長さ22.5センチ、巾3.3センチ、厚さ1.7センチのスレートの自然石で、柄の部分は幾分細く、丸味を帯び、それに比すれば先端部は、やや巾広く扁平である。全面が研磨されたように滑らかである。これは形の整ったスレートの自然石を、そのまま石剣に見たてたものと思われるが確言は出来ない。

x 石 棒(第42図5)

長さ5.9センチ、巾5.5センチ、厚さ3.1センチのスレート製石棒で、先端は山形を呈し、その下方には、くびれを付している。これは類似する自然石を選定して、それに最少限の加工を施し、石棒としたのであろう。

y 板状石片(第42図4)

長さ4.6センチ、巾3.1センチ、厚さ6ミリの薄板状を呈する頁岩片で、一方の端は方形を呈し、他は幾分丸味を帯びている。人工的なものか、自然発生的なものか明らかではないが、人工的なものとすれば護符的性格を持つものと思われる。

z 石 錘(?) (第42図6)

径7.7センチ、厚さ1.4センチの小円盤状を呈するスレートの自然石で、左右両端が対称的に僅かつつ砕かれている。大きさ、形状等から見れば石錘として好適であるが、左右の刻みの入れ方が余りにも無造作に過ぎる。果して人工遺物か疑問がある。

D 骨 角 製 品

a 釣 針(第46図5)

長さ6.7センチ、巾2.7センチの鹿角製釣針である。軸部の先端には糸結着用の膨らみを付し、逆刺は伴わない。針の先端部が僅かに欠損している。尚、この釣針の全面には貝殻細片が付着している。

b 鋸 頭(第47図1)

長さ7.2センチ、巾1.8センチの鹿角製鋸頭で、中央部に径3ミリの穿孔がある。先端部には使用痕が明瞭に認められる。

c 骨 鋸(第48図)

現在における長さ7.6センチ、巾8ミリのエイの尾棘を加工した骨鏃で、先端部が僅かに欠損している。柄部は両側から削り取り、錐状に仕上げている。

d 骨製針(第49図2)

長さ9.15センチの鹿骨を加工したもので、全面を研磨し、先端部を鋭く加工している。基部先端には径2.5ミリの穿孔がある。

e 骨製針(第49図1、第50図)

長さ18.8センチの鹿骨製針で、基部上端の突起部には縦に貫かれた孔がある。先端部は磨耗し、使用頻度の高かったことを物語っている。

f 筥状骨角器(第45図14)

長さ13.1センチ、先端部の巾2.5センチの鯨骨製筥である。先端部は薄く、丸く加工されているが、著しく磨耗し、使用頻度の高かったことを思わせる。柄部は幾分欠損しているものと思われる。

g 筥状骨角器(第45図1)

長さ14.4センチの鹿骨を縦割りにして、先端部を加工している。先端部には使用痕が認められる。

h 筥状骨角器(第45図3)

長さ9.8センチの鹿骨製筥であるが、最少限の加工を施した粗末なつくりである。

i 筥状骨角器(第45図5)

長さ9.3センチの鹿骨製筥で、前者同様の特徴を有する。

j 筥状骨角器(第45図6)

長さ8.3センチ、巾1.2センチの鹿骨製筥で、先端部を僅か2.5センチ程度加工した粗末なつくりである。

k 筥状骨角器(第45図4)

長さ9.6センチの鹿骨を縦割りにして先端部を加工している。先端部が著しく磨耗している。

l 筥状骨角器破片(第45図10)

長さ7.4センチの鹿骨製筥で、両端が欠損している。前述の各骨製筥に比し、最も扁平である。

m 筥状骨角器破片(第45図11)

現在における長さ3.8センチの鹿骨製筥先端部破片である。前述の諸群に比し、つくりは最も良好である。

n 鹿角製品破片(第45図12)

長さ6.8センチ、巾1.3センチ、厚さ7ミリの鹿角破片であるが、両面に磨痕が認められる。鹿角製筥破片であろうか。

o 爪製垂飾具(第54図)

長さ3.9センチのワシの爪を利用した垂飾具で勾玉状を呈し、先端部近くに径3ミリの穿孔がある。全面を研磨している。

p 牙加工品(第55図)

長さ5.7センチ、径2.2センチのイノシシの牙で、先端部には径3ミリ位の5箇の穿孔がある。他の先端は斜めに削り取り、その部分にも径3ミリ位の孔がある。牙製腕飾か垂飾具と推量される。

q 骨製小玉(2点)(第53図2・3)

共に長径1.8センチ、短径1.5センチ位の魚骨を利用したもので、その中央部に径3ミリの石錐による穿孔がある。本貝塚より計4点発見されたが、いずれも垂飾具として使用されたものであろう。

r 骨製垂飾具(?) (第57図)

径3.2センチ、高さ1.4センチのサメの脊椎骨の一部を利用したもので、周囲を入念に研磨し、椎体の中央部には径3ミリの孔を穿っている。垂飾具であろうか。

s 骨製耳飾(?) (第56図)

長さ3センチ、径2.1センチのシカの脊椎骨の一部を加工して、鼓状に整形し、椎体の中央部には径3ミリの孔を通してある。骨製耳飾であろうか。

t 骨製髪飾(第51図2)

現在における長さ9.4センチ、巾6ミリの鹿骨製品で、頭部には径8ミリ位の膨らみを付し、その中央部に径3ミリの貫孔がある。針ではなく、ヘアピン的一种であろう。先端が僅かに欠損している。

u 骨 刀(第52図1)

現在における長さ22.6センチ、柄部巾2.1センチ、厚さ1.3センチ、刀身部巾3センチ、厚さ1.5センチの鯨骨製骨刀で全体を入念に研磨している。柄の先端部には径2.3センチの膨らみを付し、その中央部には両面より穿孔を試みた形跡があるが貫通していない。先端の一部が欠損している。

v 骨 刀(第52図2)

現在における長さ21.2センチの入念に研磨された鯨骨製骨刀である。柄部と刀身部との境界は明瞭ではないが、巾の広さと厚さの差から区分は可能である。(柄部の長さ9.4センチ、巾2.1センチ、厚さ1.5センチ、刀身部巾2.5センチ、厚さ1.7センチ)柄部の先端には径2.3センチの膨らみを付しているが穿孔は行なわれていない。先端部が僅かに欠損している。

w 骨刀破片(?) (第52図3)

現在における長さ8.8センチ、巾1.7センチ、厚さ6ミリの鯨骨製品破片で、先端部には径2.1センチの膨らみを付している。骨刀柄部破片であろうが、前2者に比し、材質、加工とも著しく劣る。



第8図 骨刀出土状態 (XIII トレンチ)

x マグロ脊椎骨 (第59図)

遺跡中より無数に出土するマグロ脊椎骨のうちの一片であるが、これには径4ミリ位の刺突痕が3箇所を確認される。中には貫通しているものも認められる。骨鏃等による刺突を物語るものであろうか。(尚、この脊椎骨の保存状態は極めて良好で、腐蝕等によるものでないことは明らかである。)

y 鹿角製銚破片(?) (第47図3)

現長3.4センチ、巾2.4センチの扁平な鹿角製品破片である。その両端を見ると、一方は二又状を呈しているが、他は折損面で、そこに穿孔の痕跡が認められる。おそらく、銚の作製中、穿孔の段階で折れ、整形も果たさなまま、廃棄されたものと見られる。

z 鹿角製工具(?) (第45図15)

長さ4.4センチ、巾2.1センチの鹿角片を縦割りにしたもので、先端部は、やや丸味を帯び、基部には截断痕があって、全体が、扁平に仕上げられている。(厚さ8ミリ)又中央部から先端部へかけて、僅かに磨耗痕が認められる。木柄等に組み込まれて使用された一種の工具と見るべきか、判定は困難である。

E 貝製品

a 貝輪 (第58図1)

長径7.2センチ、短径6.1センチ、巾1.3センチ、厚さ1センチのカキ殻製貝輪である。断面は研磨されており、つくりは全体として良好の方である。

b 貝輪破片(第58図2)

現在における長さ8センチ、巾2.3センチのホタテ貝を利用した貝輪破片で、約4.6センチの間隔を置いて2箇所径2.5ミリの穿孔がある。全面が研磨され、加工は入念を極めて、両端が僅かに欠損している。

c 穿孔を有するホタテ貝(第58図5)

長さ10.3センチ、高さ約10センチのホタテ貝であるが、右端近くに径4ミリの孔がある。孔の周囲を観察すると石錐によるものであることは確かである。しかもこの貝殻を素材として1箇の貝輪を作製するとすれば穿孔は極めて適切な位置に相当することとなる。従って、このホタテ貝は貝輪作製のための素材として選定され、加工の第1段階として、先ず穿孔が試みられたのではなかろうか。

4. 表土採集品

a 打製石斧(Ⅲ トレンチ付近)(第36図1)

全長13.2センチ、頭頂部巾4.8センチ、刃部巾7センチ、厚さ(最大)4.6センチの砂岩製の打製石斧である。刃部の形状は、やや曲線的で、丸味を呈している。加工は極めて粗雑で、辛じて石斧の形態を表現している。時期は縄文時代中期と見られる。

b 磨製石斧(本貝塚直下の汀線付近)(第36図2)

全長7.7センチ、頭頂部巾2.2センチ、刃部巾4センチ、厚さ(最大)2センチの砂岩を素材とする磨製石斧である。頭頂部巾と刃部巾との差は、やや大きく、刃部の形状は幾分曲線的で、丸味を帯びている。この石斧は汀線付近に落下していたため、永年海水に洗われ、全体が或る程度磨耗している。刃部が僅かに欠損している。

c 円孔石(XⅡ トレンチ付近)(第40図5)

長さ6.1センチ、巾4.7センチ、厚さ1.7センチの自然石の先端部近くに径8ミリの円孔がある。(本稿46ⅩⅠ トレンチ、石製品………k 円孔石の項参照)

V 考 察

土器について

土器は3群に大別し、更に各群を数類に分類しながら記述を進めて行く。

I 群 縄文中期終末～後期初頭の土器群

1類 (第17図)

口縁部は、ほぼ直立しているが、口唇部は内傾し、その末端部に至って、再び直立する器形を示している。口縁部には2枚重ねの山形突起を取付けているが、その頂部は結び合ってブリッジ状を呈している。2枚の山形突起の中央部には円形に近い拇指頭大の孔が斜めの方向から貫かれている。又2箇の山形突起の間にはX字状の粘土紐を取付け、形式的なブリッジ状把手としている。口縁部は隆起線によって区画され、その内部には斜位又は横位の縄文が回転されている。

2類A (第18図・第19図)

これは1類の山形突起が退化した形式と思われる。すなわち2枚重ねの山形のうち、前葉が消滅して、後葉のみとなり、その中央部に1類同様の拇指頭大の孔を貫いている。この孔の両側又は片側には弧状の粘土帯を取付けているが、これは取去られた前葉の痕跡と見てよいであろう。取去った前葉の位置には鋭い稜が圍繞されているが、これは1類のものが、そのまま残されたものであろう。口唇部は研磨され、口縁部には文様帯を区画しないで斜めの縄文を回転している。

2類B (第20図)

これは1類が更に退化した形式であろう。すなわち山形は円形に変化して、車輪状を呈して来るが、その上面を観察すると、両端には2条の淵が繞っていて、いかにも1類の「2枚重ね」の余韻を残しているようである。又その中央部には1類同様の拇指頭大の孔を斜めの方向から貫いている。口縁部には沈線を以て文様帯を区画し、内部には縄文を回転している。

3類A (第21図)

これは2類Aが更に退化した形式であろう。これまで目立つ存在となっていた山形は、いよいよ後退して形式的な小頂部へと変化して来る。更に2類Aの山形突起にあった弧状の粘土帯(貫孔の周辺)が小頂部付近に原形のまま取付けられて来る。体部には縦位又は斜位の撚糸文が施されている。

3類B (第22図)

これは2類Bの退化形式と見られる。すなわち2類Bの2枚重ね突起を象徴した2条の淵付の車輪状山形は3類Bにおいては、その片側を失って1条の淵を持つ円板と化して来る。中には平坦な口縁を持つもので1片の弧状粘土紐を口縁部に取付けるだけで僅かに2類Bの貫孔のおもかげをとどめているものもある。

4類A（第23図・第24図）

これも3類Aから退化したと見られるもので、口縁部には僅かに三角形の小頂部を残すのみである。又口縁部に稜又は沈線を繞らしているものもあるが、これは2類A・3類Aの特徴を、そのまま継承しているものであろう。

4類B（第25図）

これは3類Bが、ますます退化したと見られるもので、小頂部は、いよいよ、その痕跡をとどめるだけとなる。すなわち、この場合、口縁部より下方へ向って細い1条の縦位の隆線が貼付されているが、その上端部に小さな丸味を持たせることによって2枚重ねの山形突起を辛じて表現するものとなる。この段階に至っていよいよ山形突起は小型化し、イミテーション化している。

5類（第26図）

これは2類A・Bから退化したものと見られる。すなわち山形突起はカドのとれた緩やかな三角形を呈するものや僅かに小頂部を表わす程度のもとなり、その中央部には、2～3箇の小円形凹を押捺したり、小頂部の中央部に小孔を貫いているものなどがある。殊に、これらの小円形凹や、小頂部中央にある小孔などは2類A・Bに現れた貫孔が、そのまま変化した姿と見てよいであろう。又口縁部に稜か沈線を繞らしていることも2類A・Bからの継承であろう。更に小円形凹や貫孔の下方に沈線による渦巻文を付しているが、これも、このグループに現れる特徴である。体部は沈線によって任意に区画され、その内部には撚糸文又は斜行縄文を回転している。

6類（第27図）

これは5類又は2類A・Bから退化したものであろう。山形は緩やかとなって、波状を呈し、その中央部には沈線によって渦巻文が付されて来る。これは5類の円形凹の下方にあった渦巻文が貫孔又は小孔が消滅した代りに小頂部へ移動したものであろう。又2類の貫孔が退孔して渦巻文と化したものもあるであろう。口縁部には沈線を以て文様帯を区画し、その内部を縄文又は撚糸文を以て埋めている。

7類（第28図）

口縁部は内傾し、口唇部に至って再び直立する器形を示す鉢口縁部破片である。山形突起は三角形の頂部が平らに切り取られて、いわゆるコニーデ状を呈しているが、その頂部には竹管によると見られる一条の刻み目が入れている。又口縁部付近を回っている鋭い稜にも、（山形突起の直下付近）竹管による2箇の刻み目が入れている。更に口縁部においては長方形の四隅を弧状の隆線を以て区画し、その内部には縄文を回転している。残された磨消面の中央部にも沈線による円形の区画部が設けられ、内部には斜位の縄文が回転されている。

8類（第29図）

口縁部は強く内側へ傾き、口縁部と口唇部との間には鋭い稜を表わしている鉢形土器で、

勿論何らの山形突起をも有していない。体部には縄文又は撚糸文を付している。

9類 (第30図)

比較的小形に属する鉢形土器で、口縁部は直立し、山形突起を有しない。口縁部より体部へかけては沈線による幾何学文様を大胆に書き、体部のところどころにはジグザグの縄文又は撚糸文を付している。

10類 (第31図)

口縁部は平坦で、特に文様帯を区画しない鉢形土器である。口縁部より体部へかけて斜位の縄文又は縦位の撚糸文を付している。尚、7～10類は前述の6類までの系列には入らない、I群中においては例外的土器群で、その出土量も他に比し少量である。以上の土器群を形式別に分類し、各々の出土量を示せば、およそ次の通りである。

- ① 中期末一大木10式 (40%)
- ② 堀の内I式 (40%)
- ③ 称名寺式 (10%)
- ④ 大木8b式 (10%)

従って中期末一大木10式、並に堀の内I式に併行するものが、その大勢を占めることになる。しかし、これら土器片の中には明瞭に形式区分しかねるものも若干含まれているから、上記の数量は、その概略を示したものに過ぎないが、本貝塚が中期末～後期初頭を、その中心時期としていることは疑いを容れないところである。

尚、今後、これら土器片に対する検討が更に進めば、むしろ堀の内I式の方に或る程度ウエイトが、かかって来るかも知れないとの予想も抱いている。

II群 縄文前期の土器群 (第12～14図・第33図)

昭和45年以来、4次にわたる本貝塚の発掘調査中、縄文前期に属する土器小片は、後期初頭の土器群に混って極めて稀に発見される程度であった。しかし、このたびの第4次調査において、XIIトレンチ貝層より、大量に、まとまって発見され、はじめて層位的にも明確に確認されるに至った。

これらの土器群は、いずれも大形の深鉢で、口縁部は大部分が平縁であるが、口唇部土面にも刻み目を入れたものや縄文を回転したものなどがある。中には口唇部に対して内外両面から交互に強く刻み目を入れた結果、上面より見れば、一見鋸齒状を呈するものもある。更に例外的ではあるが、口唇部土面に高さ5ミリ位の小三角形突起を3箇、3ミリ間隔に取付けているものもある。

又今回の調査において発見された土器片には口縁部より底部へ至るまで復元されたものはないが、これらの破片に混って、体部に続く尖底部破片1点が発見された。又口縁部より底部近くに至るまでの片面が復元されたものがあるが、これも底部近くの湾曲の度合から見て、当然尖底を有する深鉢であることが想像される。これらの資料から本トレンチ出土の前期土

器群には、円底を有するものもあるであろうが、尖底を有するものも少なからず含まれていることが考えられる。

これらの土器群には縄文のないものはなく、器の表面には、いずれも縄文を回転している。縄文は羽状縄文、又は斜行縄文で、羽状縄文には右撚り、左撚りの原体を別々に回転したため、結束の現れていないものや、あらかじめ、交叉させた原体を回転させて一度に施文したため、結束を生じたものとの2種類がある。色調は黒褐色又は淡褐色を呈し、厚手で、つくりは粗雑であり、胎土中には多量の繊維を含入している。

以上の諸特徴から見て、これら土器群の時期は上川名Ⅱ式と大木Ⅰ式の、ほぼ中間に位置するものと見られる。すなわち山内清男氏のいう室浜式か、林謙作氏の分類による桂島式に併行するものと思われる。

Ⅲ群 朱彩された土器群 (第32図)

これらの土器群には大形・小形の2種類があり、又器厚にも厚薄の別がある。今回の調査においては、10点発見されたが、山形突起を有する鉢形が大勢を占め、いずれも朱彩されていた。しかし土質は極めて粗悪であり、又焼成も不十分で、実用的用途を持つものとは到底考えられない。殆どXIIIトレンチより、まとまって発見されたが、石剣・骨刀・装身具類・石棒等と伴出したものである。一種の祭祀関連遺物であろうか。

篋状骨角器について

本遺物の起源に関しては、舟の櫂を象ったものとする説がある。(櫂状骨角器とも呼ばれる) すなわち、航行・流通・交換・運搬等の安全・円滑化を祈念した信仰関連器具の一種であって、それが後に日用利器へと転化したというのである。宮城県松島町宮戸島所在の縄文後期貝塚においては人骨の腰部に密着した状態で発見されたが、それは、つくりや出土状態から見て、腰飾と判断されるものであって、以上のことを立証する傍証資料の一つであるというのである。又本遺物は新石器時代に至って、はじめて出現するが、舟を知らなかった旧石器時代には現れるはずがなく、舟・いかだ等を知るに至った新石器時代において現れるのは当然であるとしている。

又次のような一説もある。本遺物は元来、日用利器の一種として現れたもので、その祖形は、つまみ・刃等を備えていることから、石製皮はぎに求められるという。又皮なめし用としては最適の器具であったろうともいう。

これら両説のうち、いずれが正しいか、或いは両説とも肯定すべきものか、それとも他に起源を求めるべきものか、速断は避けたい。

土器類を除く本貝塚の出土品中、意外に出土量の多いのは、ここにいる、いわゆる篋状骨角器である。第1次～第4次にわたる調査中、計25点発見されている。これには精粗の別・大小の別・素材による別等が多少見られるが概ね長さは約14～15センチ位で、主として鹿骨

を素材とし、先端は扁平で、丸く、篋状を呈している。発見される篋は極端に磨耗したものが多く、使用頻度の高さを物語っている。その磨耗部を観察すると、無数の擦痕のほか、中には縦に走る人頭髪程の太さの擦痕を有するものも少なからず発見される。本遺物は一体どのような使用目的を有していたのであろうか。この遺物は縄文の各期を通じて発見されるものであり、又その発見地も海岸部、内陸部を問わない。更に出土量の多いことや、つくりの無雑作な点を考えれば、日常生活に最も密着した日用器具の一種であったことも疑いないところである。その形状、大きさ等から先ず考えられる機能は少量の物質を擦り潰すことである。例えば「トリカブト」等少量で、効力を発揮するようなものを調製するには最適といえる。(果してトリカブトが使用されたか、どうかは不明であるが。)更に比較的大形で、先端部が巾広く、薄く加工されているものは、皮なめし用具としても、好適であったろう。又この方面で多量に獲得されたカキ等の生身を摘出することは不可能と思われるが、煮た貝の身を摘出することは可能であったと思われる。これと同様に細身の篋を用いればクルミ等の堅果の実を取り出すにも最適であったろう。更に土器の生産に当っては整形や施文のための器具となったのではあるまいか。殊に篋には広巾のものと細身のものとがあるが、施文具として考えた場合、描出する文様の種類によって自由に使い分けていたことも考えられる。しかも、この器具が小形で、扁平な軽量器具であることを思えば、強い力を加えるべき器具とは思われなから、以上の用途には充分適していたと考えられる。又篋の中には少数ではあるが、先端部のつくりが極めて無雑作で、厚く、むしろ先端部の側方を3~4センチにわたって薄く加工し、使用痕の顕著なものがあるが、これなどは前述の土器整形には最適といえる。しかし、この種骨角器には次のような特殊例もある。すなわち通常のもの $\frac{1}{2}$ 位の長さのものや、同じ程度の長さで水牛の角に類似する角材を素材とし、入念に精製につとめたものもある。更に長さは比較的短いが、表面の先端部を4センチ位にわたって平らに研磨し、裏面には丸味を持つ鹿角の原面を、そのまま残しているものもある。又前述のように先端部が著しく磨耗していて、使用頻度の高かったことを示すものがある反面、応急的に只一度の使用を以て廃棄されたと見られる「使い棄て」的用法を思わしめるもの等がある。これらの遺物は前述のように、出土量も比較的多く、その作製法・素材・形態等の面において多様性が認められるから、その用途也多岐にわたるものであって、或る特定の使用目的に限定されるものではあるまい。おそらく、人々の日常生活に密着し、あらゆる面で、その効用を発揮した便利な日用器具の一種ではなかったろうか。

又当南三陸方面の孤島においては多くの漁具類と伴出していることから他地方においては見られない漁撈生活と密着した独特の用法のあったことも考えられる。

出島には、本貝塚のほか、縄文前・中期の遺物を出土する余名子館貝塚のあることは既に述べた通りであるが、篋状骨角器は1~2の例を除き、縄文後期初頭の土器群と伴出していることが多い。すなわち、縄文後期初頭に至り、種類・数量とも急激に増加して来る。それは後期に至って土器の器形分化が目立って来ることと照応するものようであるが、これは土器の器形分化と同様、生活文化の複雑化を反映するものであろうか。

以上この骨角器について観察し、思うまま推論を試みた。勿論大胆極まることである。このことに関し、諸賢の御教示を乞うこと切である。

錨形釣針について

錨形釣針とは4～5センチ位の長さを有し、軸部を中心に左右に各々1本ずつの針を付した鹿角製の釣針で、その形態が錨に酷似しているため、この名がある。

三陸沿岸における縄文中期後葉以降の貝塚は骨角牙製品、中でも漁具に比定すべき遺物を豊富に出土しているが、本遺物も、このような三陸沿岸における漁撈文化の展開の中で考案され、消滅して行った漁具の一種であって、当地域を特色づける遺物の一つとなっている。

この釣針は第1表に示すように13遺跡から、計31点の出土を見ているが、その分布状況を第9図の略図によって辿つて見ると北は三陸沿岸の大船渡湾岸より、出島及び石巻湾岸地帯を含んで南は松島湾方面にまで及んでいる。これらの分布範囲を更に地域別にまとめると大船渡湾周辺、南三陸沿岸地域、石巻湾岸地域・松島湾岸地域の4分布圏を設定することが可能である。

伴出する土器の形式を基準にして、本遺物の占める時間的範囲を求めると一応大木8b式期から、堀の内I式期までとなる。しかし大木8b式土器と伴出した中沢浜貝塚の出土品を以て表土採集品とする説があるから、若しこれを除外すれば時間的範囲は更に狭ばまり、大木9式期から堀の内I式期までとなる。本遺物は、このように、限られた地域内で、比較的短期間使用され、やがて消滅して行った特殊な遺物であるといえる。

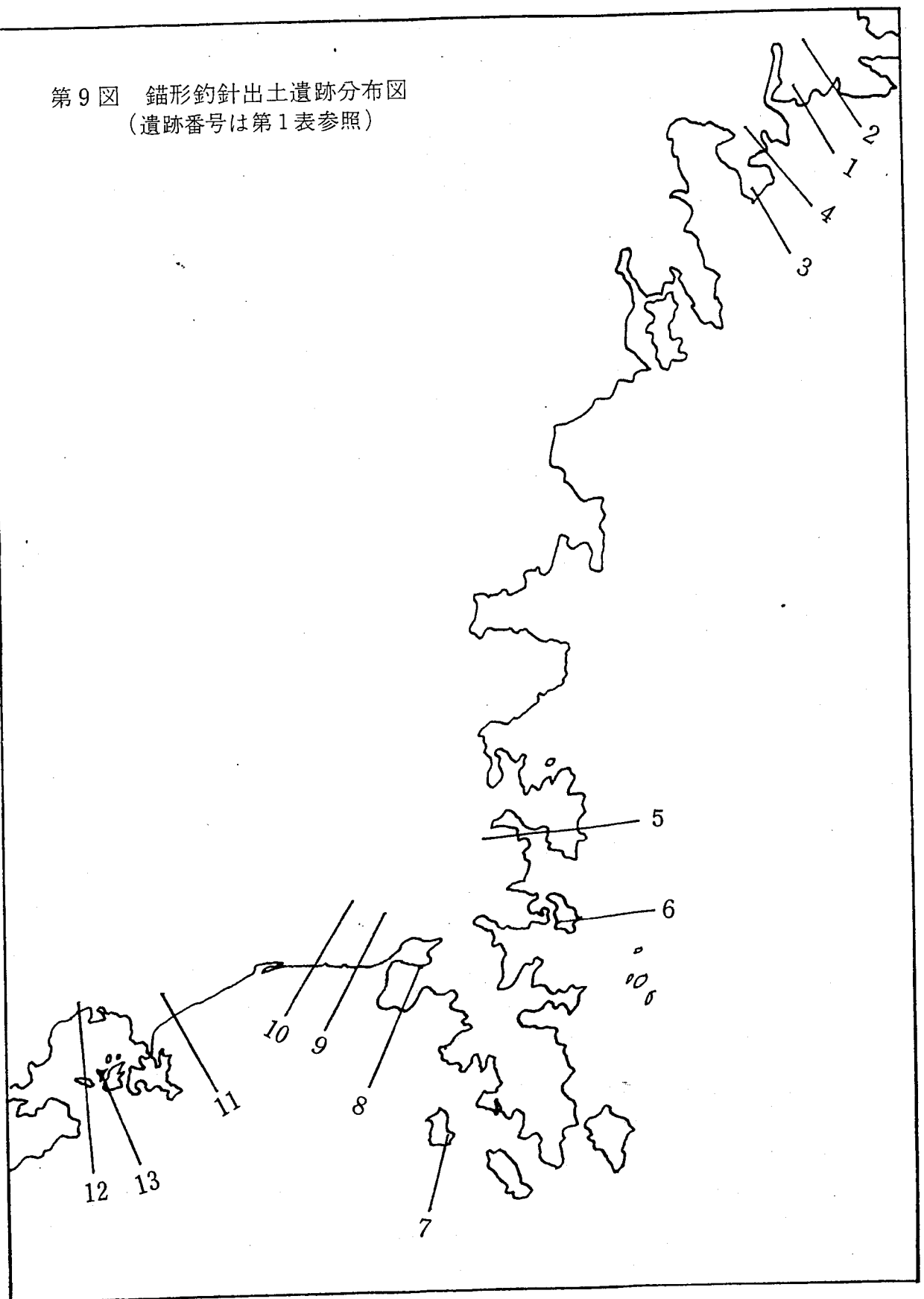
錨形釣針は、その形状や細部の加工状態、特に軸頭部の変化などから、次の5類に分類出来る。しかし、この分類は飽くまでも試案に過ぎない。今後、同種遺物の出土例増加と共に当然修正を加えるべき余地を多く残している。

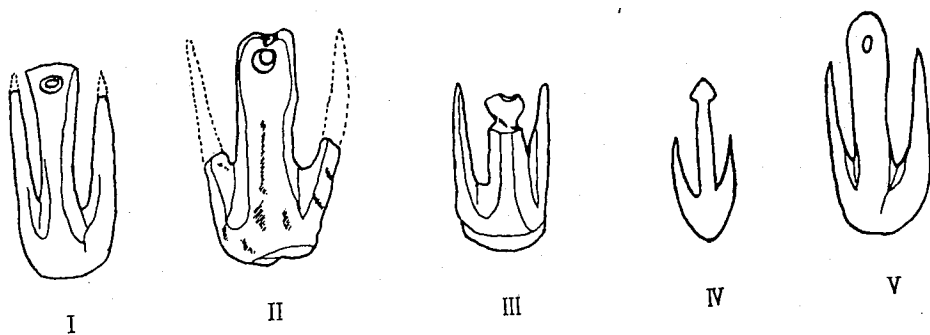
第I類（第10図参照）

軸頭部には穿孔を有し、頂部が平坦に加工されているものである。その平面形態を見ると、針部と軸部との関係から、錨形、山字形の両形態のあることが知られる。本類に属するものとしては、大木9式土器に伴い、仁斗田貝塚より2点、大木10式土器に伴い、天雄寺貝塚、南境貝塚、西の浜貝塚より各々2点、堀の内I式併行土器に伴うものとしては出島山下貝塚より3点出土している。その他伴出土器の不明なものとしては、大洞貝塚から1点、沼津貝塚から2点発見されている。尚、前述のように中沢浜貝塚出土の1点は大木8b式土器に伴っていたといわれるが、又表面採集によるものとする説もあって詳らかではない。（計15点）

天雄寺貝塚出土の1点は、刻み様のものが軸頂部に残っており、後に述べる第II類と類似しているが、それは明らかに糸結着の際生じた使用痕と見られるため本類に含めた。

第9図 錨形釣針出土遺跡分布図
(遺跡番号は第1表参照)





第10図 錨形釣針軸部形態模式図

第Ⅱ類 (第10図参照)

穿孔を有する軸部の頂部を一旦、平坦に加工し、更にその上に刻みを付したものである。山字形・錨形の両形態がある。刻みは穿孔部に糸を結着する際、そのズレを防ぐ滑り止めの役割を果たしたものであると思われる。

この種のものは、大木10式土器に伴い屋敷浜貝塚、南境貝塚より各々1点、門前式土器に伴って門前貝塚から1点、堀の内I式系土器に伴い出島山下貝塚から2点出土している。尚、伴出土器は不明であるが、沼津貝塚からも1点の出土を見ている。

(計6点)

第Ⅲ類 (第10図参照)

本類に属するものは、穿孔部欠損により、再加工を施したものである。すなわち穿孔部が、真中より折れ、残った軸部に両側面より刻みを入れることによって突起様のものを作り、更に折れ残った穿孔の下半分に第Ⅱ類で見られた軸頂部の刻みと同様の機能を持たせているものである。このことから見て、この釣針の本来の姿は第Ⅱ類と同様であったと思われる。従って第Ⅲ類として、特に1形態を設けなくて、第Ⅱ類の垂流として残すべきものかも知れない。これは出島山下貝塚において堀の内I式系土器に伴って1点発見されているのみである。

第IV類 (第10図参照)

山字形を呈し、軸頭部には穿孔の代りに糸結着のため山形突起を付しているものである。本類に属するものは、中沢浜貝塚より大木8b式土器に伴って出土したと伝える1例があるのみである。

第V類 (第10図参照)

軸頂部は丸味を帯び、軸頭部には穿孔を有するもので、僅かに山字形を呈している。第IV類同様、中沢浜貝塚出土の2点以外未だ発見されていない。

以上5類に分類したが、それらの分布状況を見ると、第1類は分布圏すべてに、第II類は南三陸沿岸及び石巻湾岸に、第III類は南三陸沿岸に、第IV類・第V類は大船渡湾周辺に、それぞれ分布している。

又、伴出土器との関連から見ると、第I類は大木9式以降の土器に、第II類は大木10式以降の土器に、第III類は堀之内I式系の土器と伴出していることが知られる。(中沢浜貝塚出土の4点については、前述の如く、その伴出土器が不明確なので、一応この項においては除外した。)

以上のように本遺物は多くの未知の部面を残している。13遺跡より出土した僅か31点の出土品が多くを語らないのは当然である。しかし、この方面における学術調査が進み、やがて多くの報告例に接する機会も訪れるであろう。その時こそ本遺物が、すべてを語ってくれる時機なのかも知れない。すなわち本遺物の編年区分も、発生地域の想定も、大いに期待される時機であると思われる。

第1表 遺跡別錨形釣針出土数一覧表

	遺 跡 名	時 期	出 土 数 カッコ内は柄部の完全なもの	錨形釣針柄部 形 態	伴 出 土 器	参 考 文 献 番号は第2表参照
1	大船渡市蛸ノ浦貝塚	中 期	1(0)		大木9式	7
2	" 大洞貝塚	後 晩 期	1(1)	I(1)	?	1
3	陸前高田市中沢浜貝塚	中～晩期	4(4)	I(1)IV(1)V(2)	大木8b式?	4, 12, 14
4	" 門前貝塚	後 期	2(1)	II(1)	門前式	4, 11, 14
5	雄勝町天雄寺貝塚	中・後期	2(2)	I(2)	大木10式	8, 13
6	女川町出島山下貝塚	前～後期	6(6)	I(3)II(2)III(1)	堀之内I式	9, 10
7	石巻市仁斗田貝塚	中 期	2(2)	I(2)	大木9式	3
8	" 屋敷浜貝塚	中 期	1(1)	II(1)	大木10式	2
9	" 沼津貝塚	中～晩期	3(3)	I(2)II(1)	?	5, 6
10	" 南境貝塚	中・後期	5(3)	I(2)II(1)	大木10式	2, 13
11	鳴瀬町川下リ貝塚	中～晩期	1		?	13
12	松島町西の浜貝塚	中・後期	2(2)	I(2)	大木10式	13
13	塩釜市桂島貝塚	中 期	1		?	12

第2表 錨形釣針関係参考文献一覧表

1	朝日新聞社「日本人類史展図録」(昭和48年)。
2	楠本政助「矢本町史第1巻先史」(昭和48年)。
3	楠本政助「石巻市田代島仁斗田貝塚」(「石巻地方の歴史と民俗」, 昭和48年)。
4	小岩末治「貝塚と漁撈」(「岩手県史」第1巻, 昭和36年)。
5	佐藤虎雄「我国上代の漁業と文化」(「勢陽論集」第1輯, 昭和5年)。
6	東北大学文学部日本文化研究所「沼津貝塚出土石器時代遺物Ⅱ」(「考古資料 第二集」, 昭和38年)。
7	西村正衛「内陸文化の繁栄——縄文中期文化」(「世界考古学大系」Ⅰ, 昭和34年)。
8	辺見鞆高「縄文式文化時代における郷土の生活」(「小牛田町史」上巻, 昭和45年)。
9	辺見鞆高「出島山下貝塚第一次調査概況報告書」(昭和46年)。
10	辺見鞆高「出島山下貝塚第二次調査概況報告書」(昭和47年)。
11	吉田義昭「門前貝塚」(昭和35年)。
12	渡辺誠「縄文文化時代における釣針の研究」(「人類学雑誌」第74巻第1号, 昭和41年)。
13	渡辺誠「縄文時代の漁業」(昭和47年)。
14	東 登「気仙縄文式時代の骨角製漁撈器具考」(昭和37年)。

(国学院大学 大学院生 辺見 端)

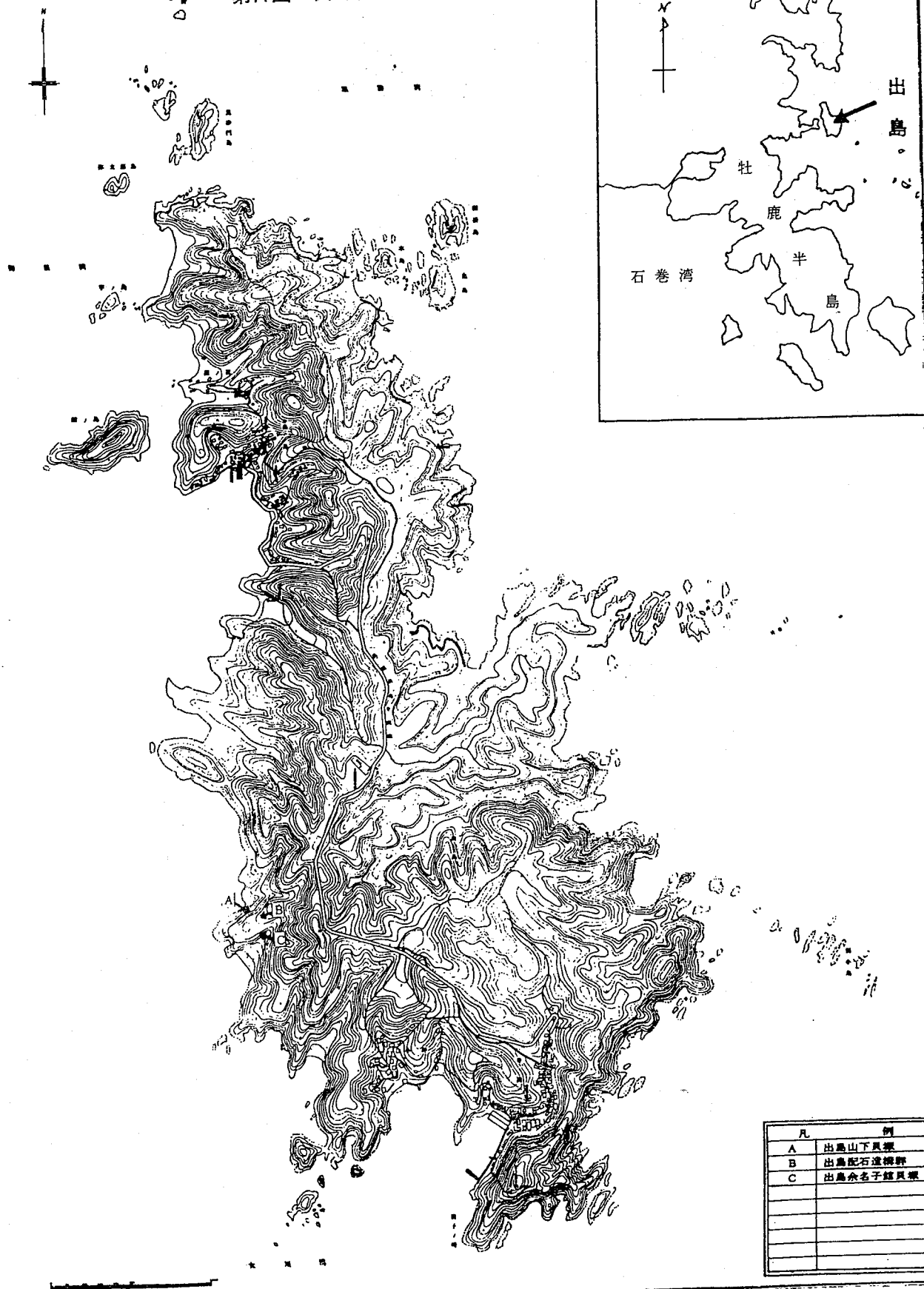
本台地付近は現在のところ、出島における遺跡の集合地点といってよい。すなわち、台地上には配石遺構群が分布し、台地の南北両斜面には、それぞれ余名子館・山下両貝塚が堆積している。又未確認ではあるが、本台地付近において奈良～平安期の土師器・須恵器が発見されているから、同時期に属する遺跡のあることも確実である。更に時代は下るが、経塚のあることも知られている。この台地が約30メートルの標高を示し、又約50アールに及ぶ平坦面を有することなどは最も恵まれた条件というべきで、これに匹敵すべき好条件を備えた地が他にあることを未だ聞かない。

石器時代において堅穴住居が営まれたのは、勿論本台地上で、その最も早い時期は縄文前期にさかのぼる。先ず縄文前期～中期にかけ、貝塚は主として南斜面の余名子館方面に堆積し、後期に入ると北斜面の山下方面に堆積が始まったのであろう。しかし、この斜面には縄文前期においても海拔29メートル付近にある凹地を満たす程度の浅い堆積は行なわれていたのであろう。これが、このたびの発掘調査において確認された貝層と見られる。縄文後期初頭においては、更にその上に大量に堆積が進み、現在ⅩⅢトレンチにおいて見られるような層位を示すことになったのであろう。しかし本台地付近が夜明けを迎えた時期を縄文前期といい切ってしまうことは早計であろう。それは本貝塚に対する、これまでの発掘調査において、更に古い時期に属する土器小片（縄文早期末？）4～5点が発見されているから本台地付近の、どこかに縄文早期末頃の堆積が眠っていることも考えられるからである。それは本貝塚を中心に考えた場合、その東方に続く斜面か、それとも本貝塚の西方、すなわち本台地の西端付近と見当がつけられる。

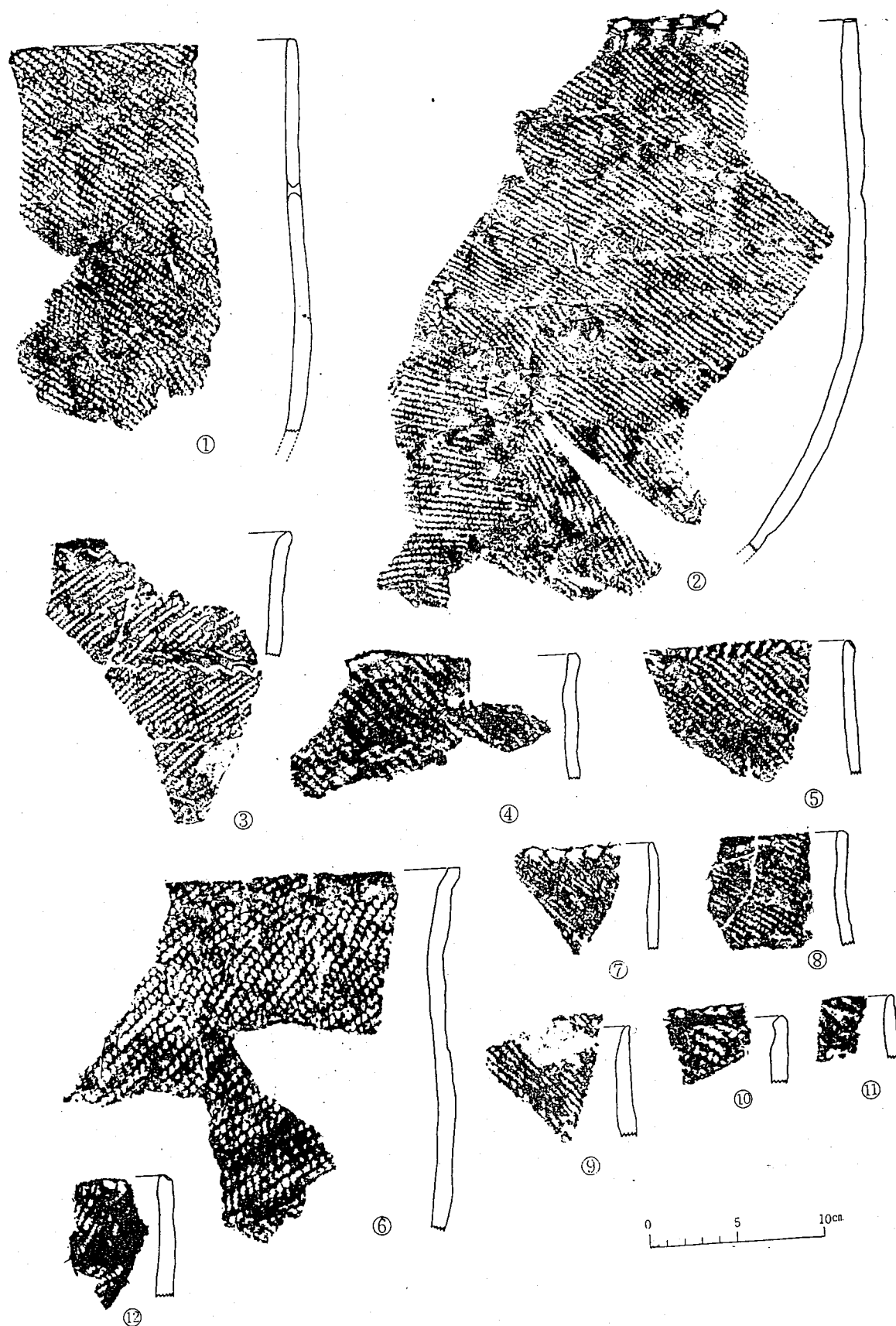
このように本台地付近が開明期を迎えた時期は縄文早期末頃かも知れないが、最も、めざましい開花期に入るのは縄文前・中期から同後期初頭頃で、特に後期初頭においては、むしろ爛熟期に入っていたと考えられる。

版 圖 · 真 寫

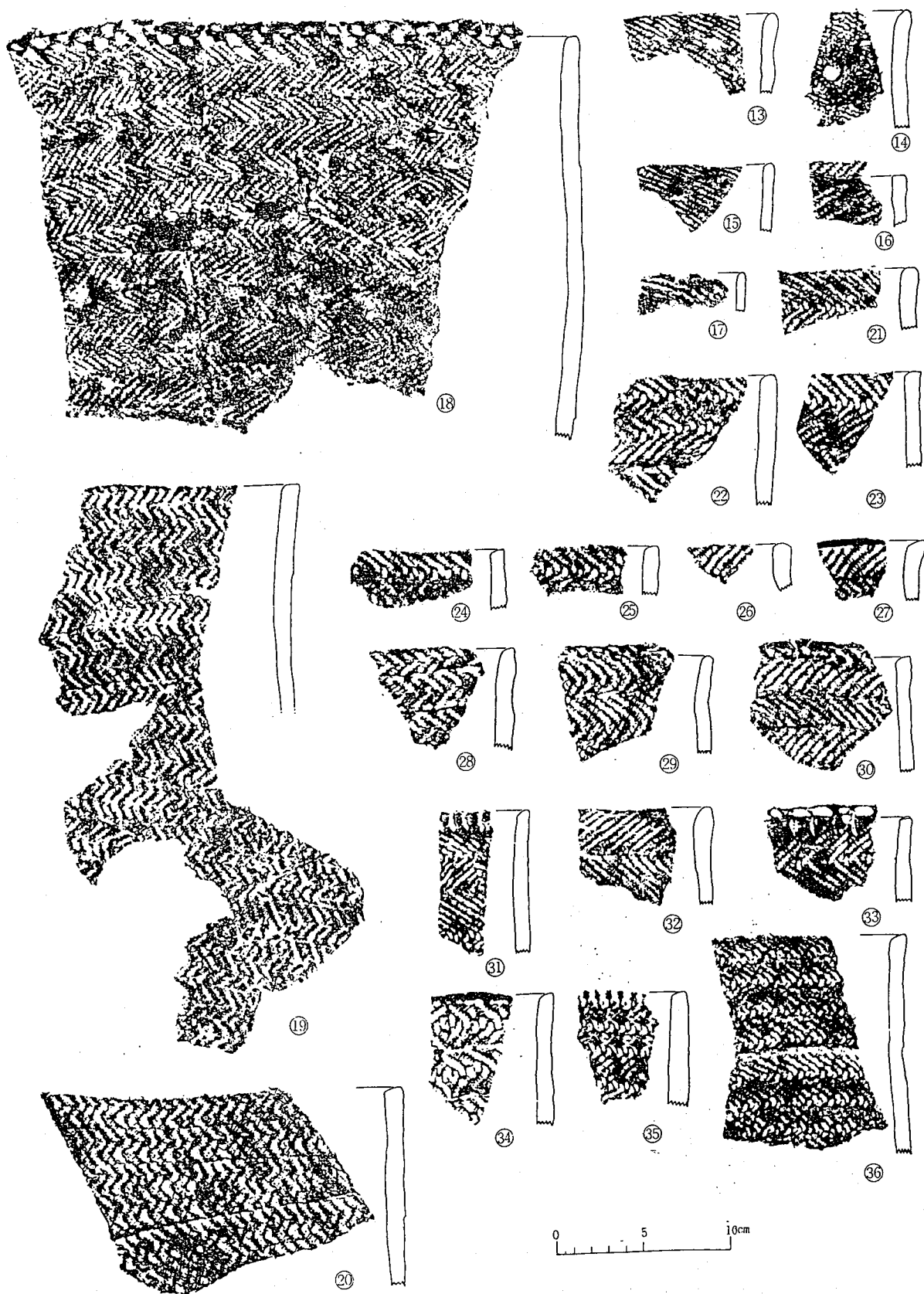
第11図 出島全図



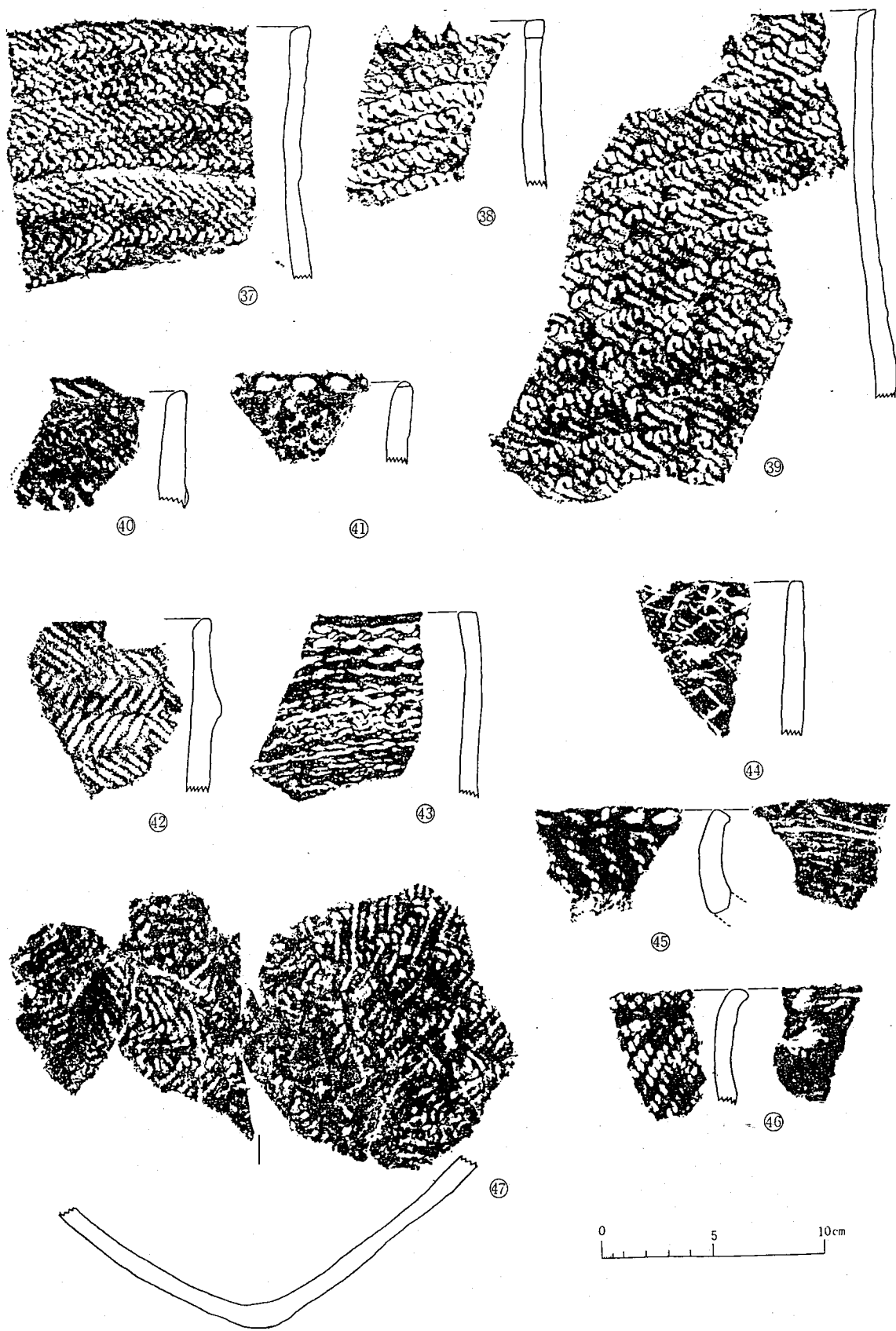
凡	例
A	出島山下良郷
B	出島配石達頼郷
C	出島余名子郷良郷



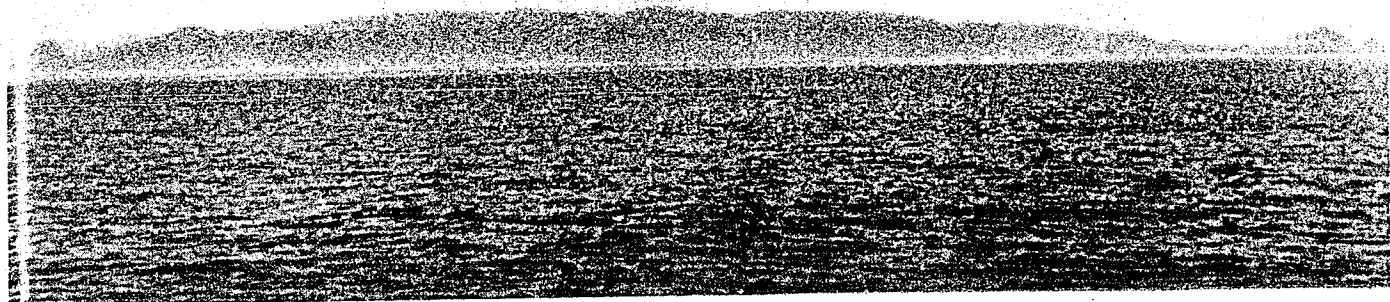
第 12 図 土 器 拓 影 (縄文前期初頭)



第 13 図 土 器 拓 影 (縄文前期初頭)



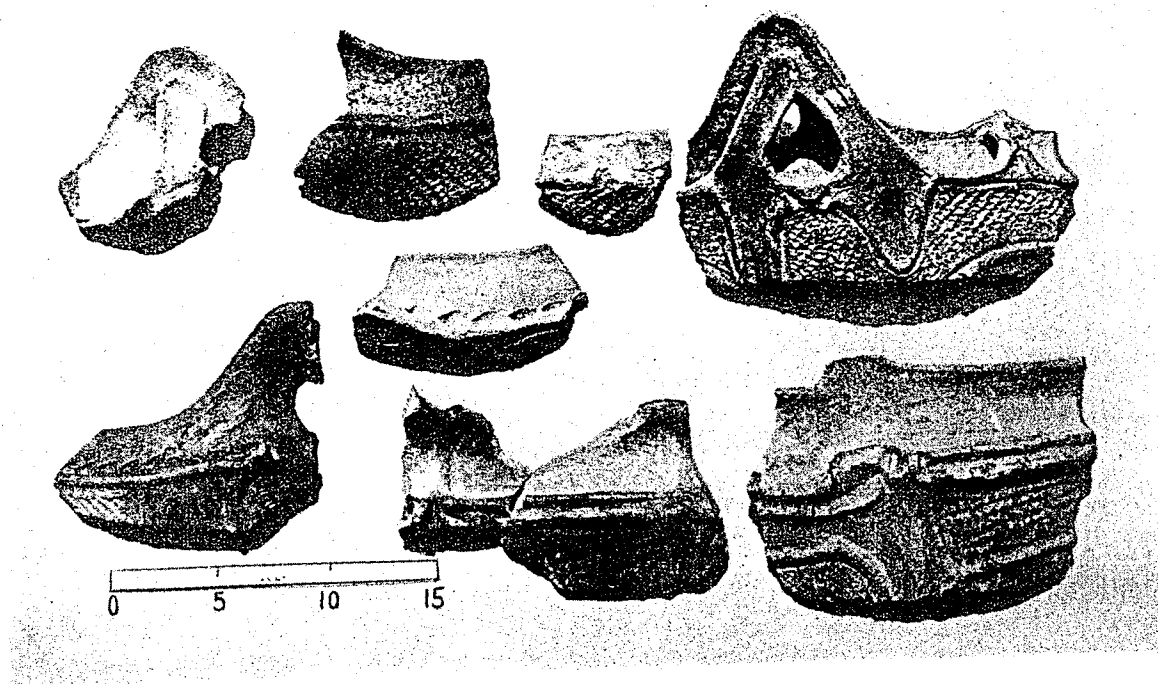
第14図 土器拓影(縄文前期初頭, その他)



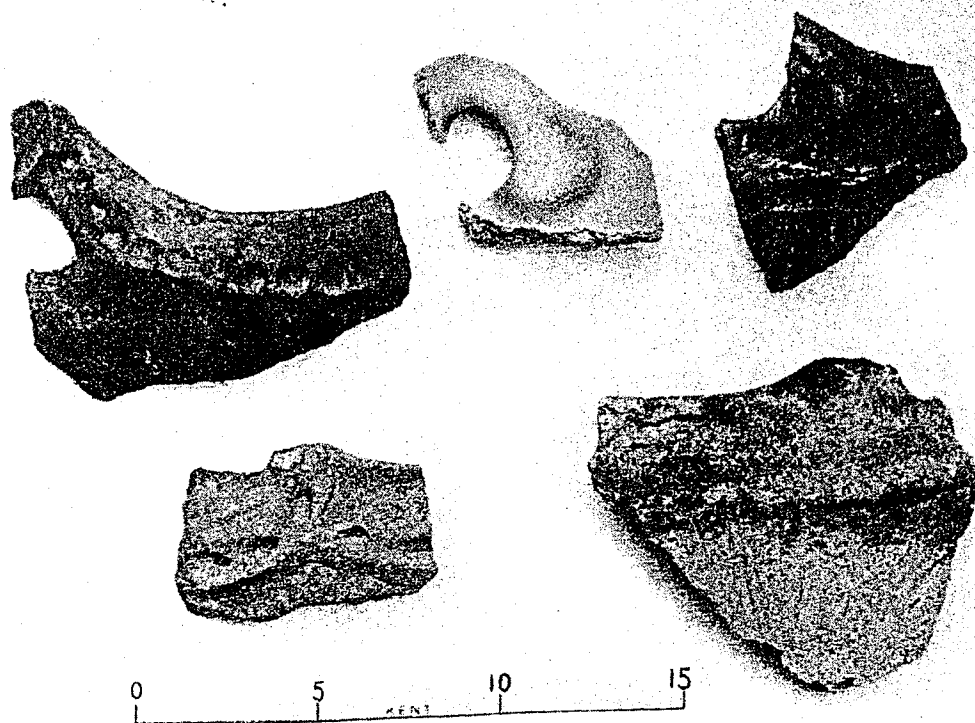
第15図 濃霧のなかに、かすむ出島
(昭和48年8月8日、南東方洋上より撮影)



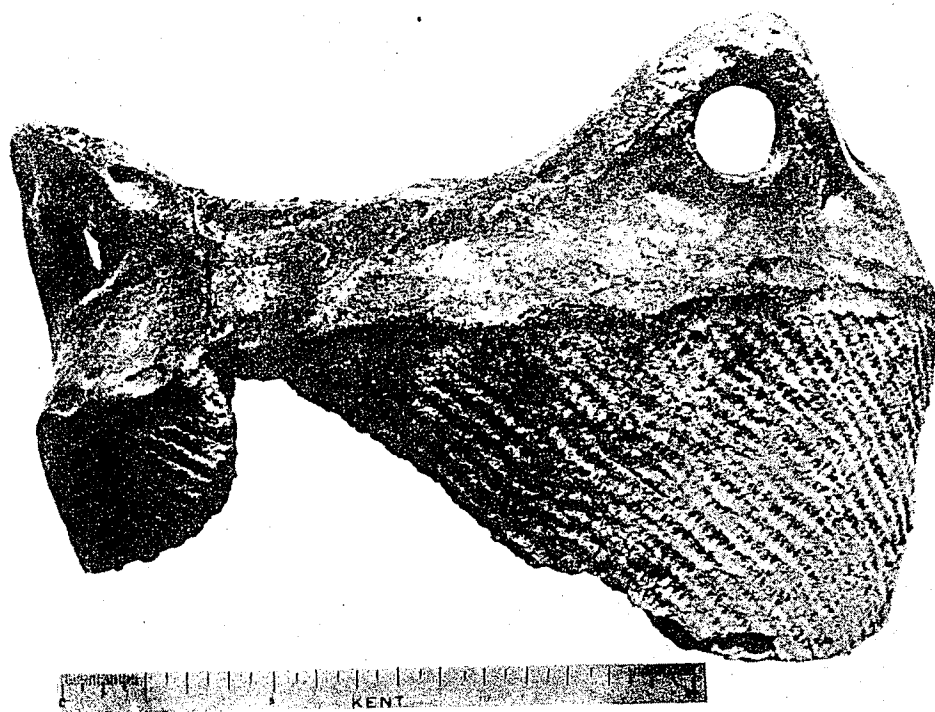
第16図 出島遺跡全景
(半島状台地上には配石遺構群が
南斜面(左方)には余名子館貝塚が
北斜面(右方)には本貝塚がある。)



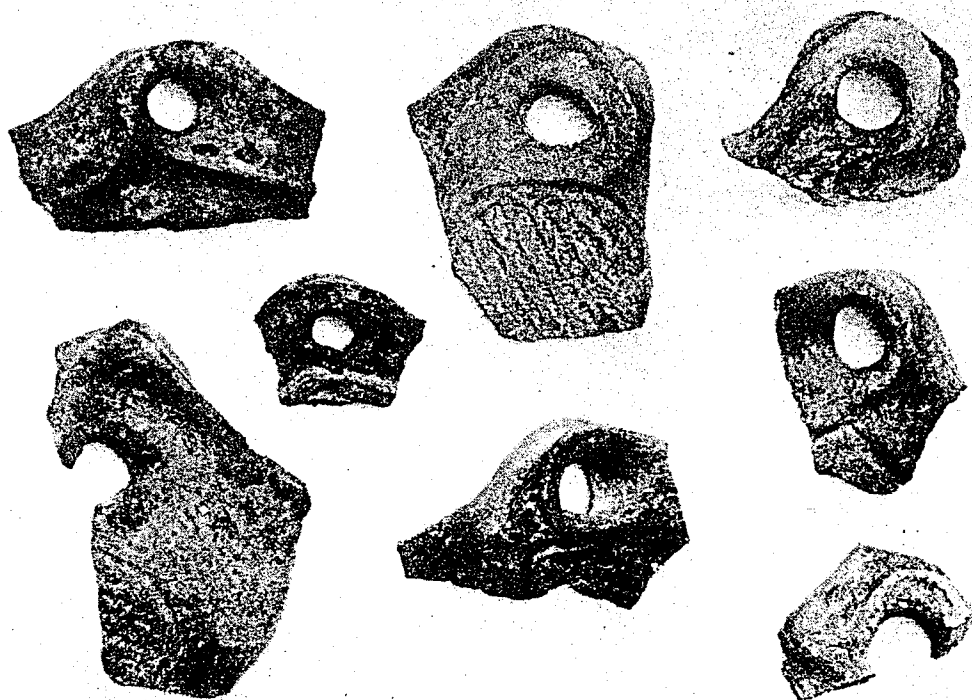
第 17 図 1 類



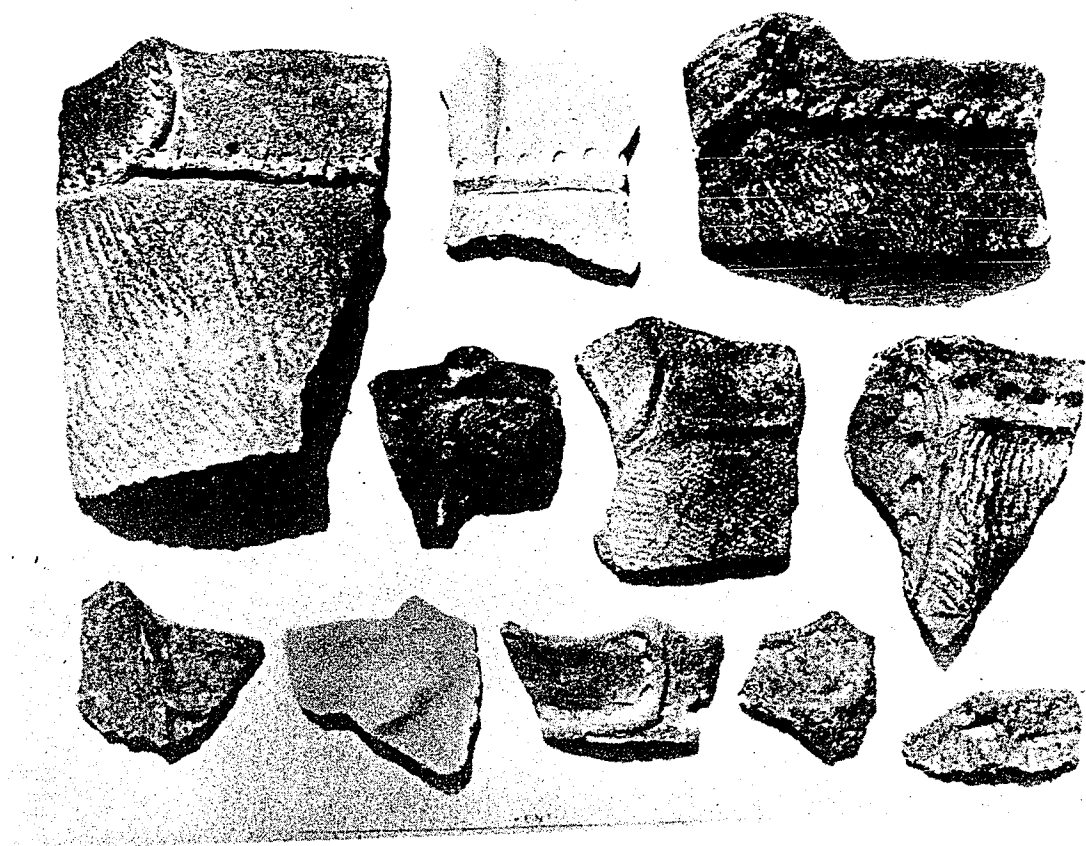
第 18 図 2 類 A



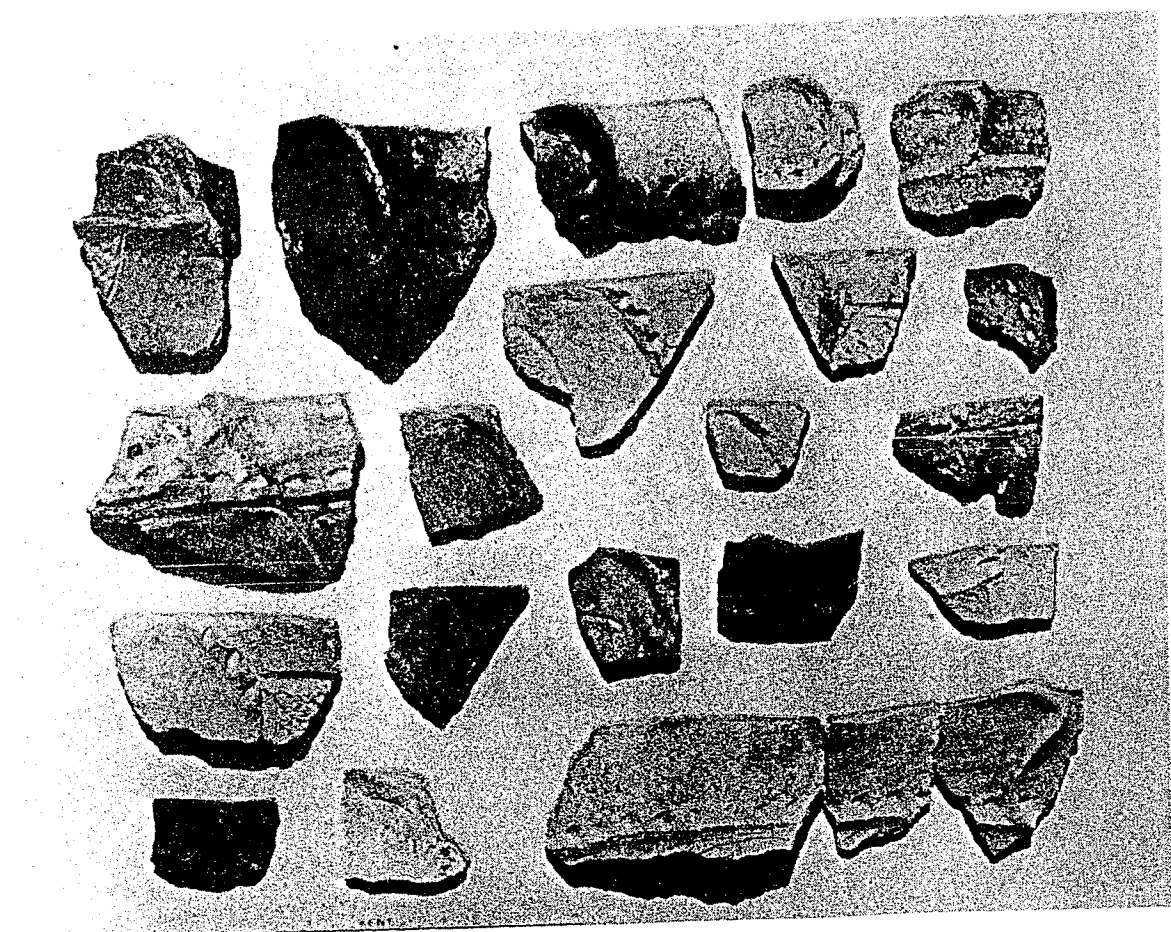
第 19 図 2 類 A



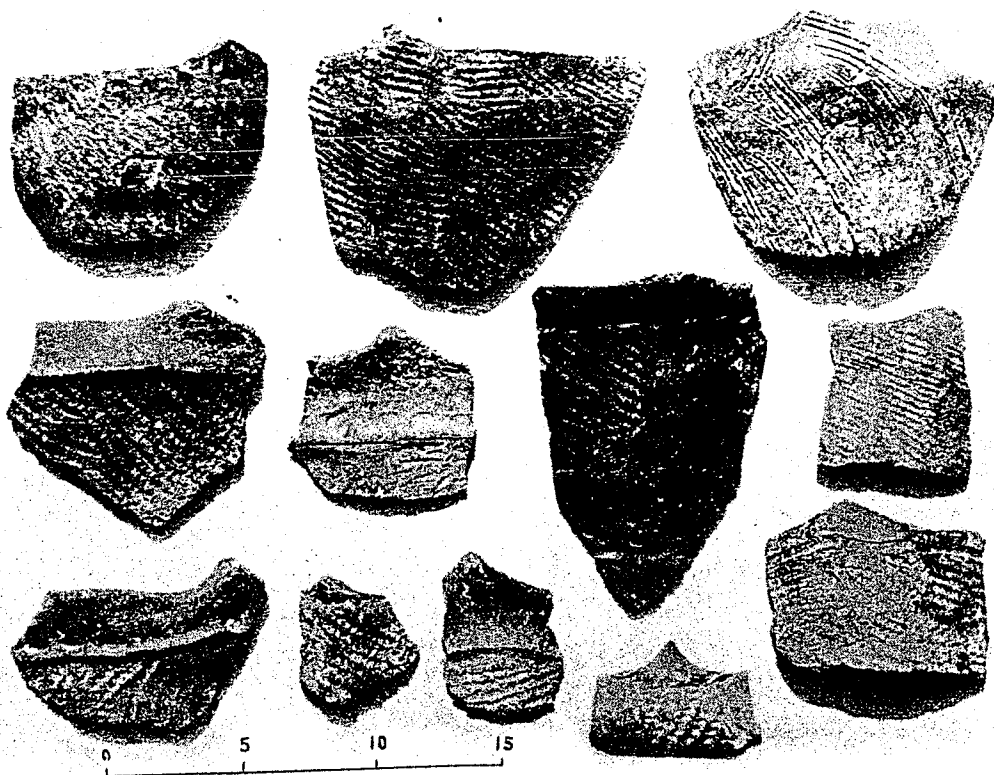
第 20 図 2 類 B



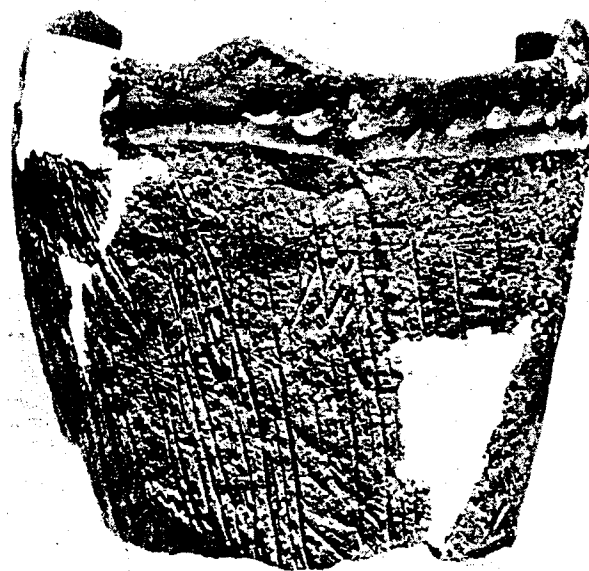
第 21 図 3 類 A



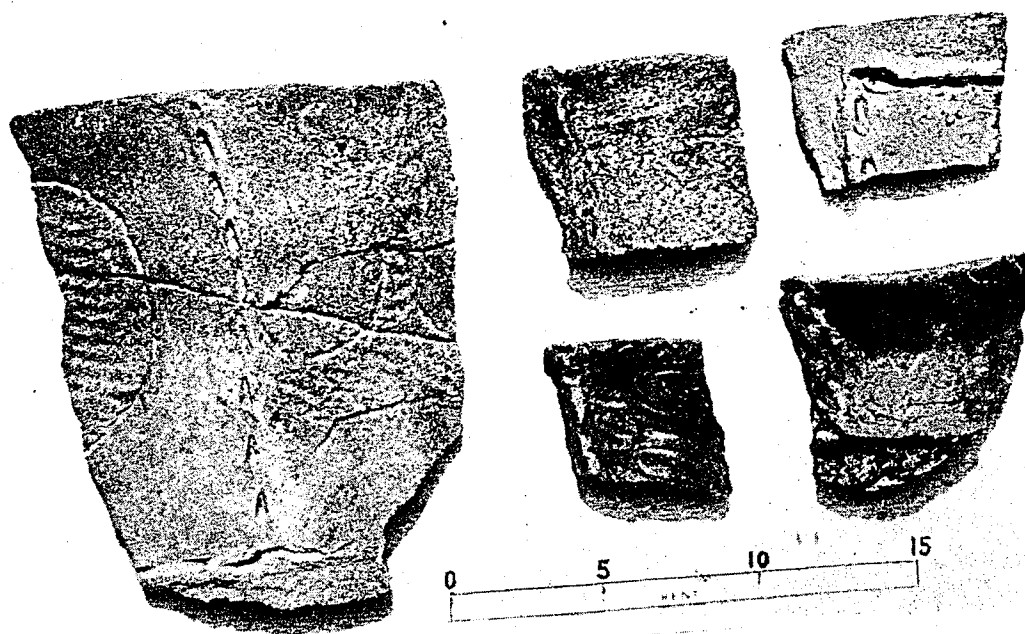
第 22 図 3 類 B



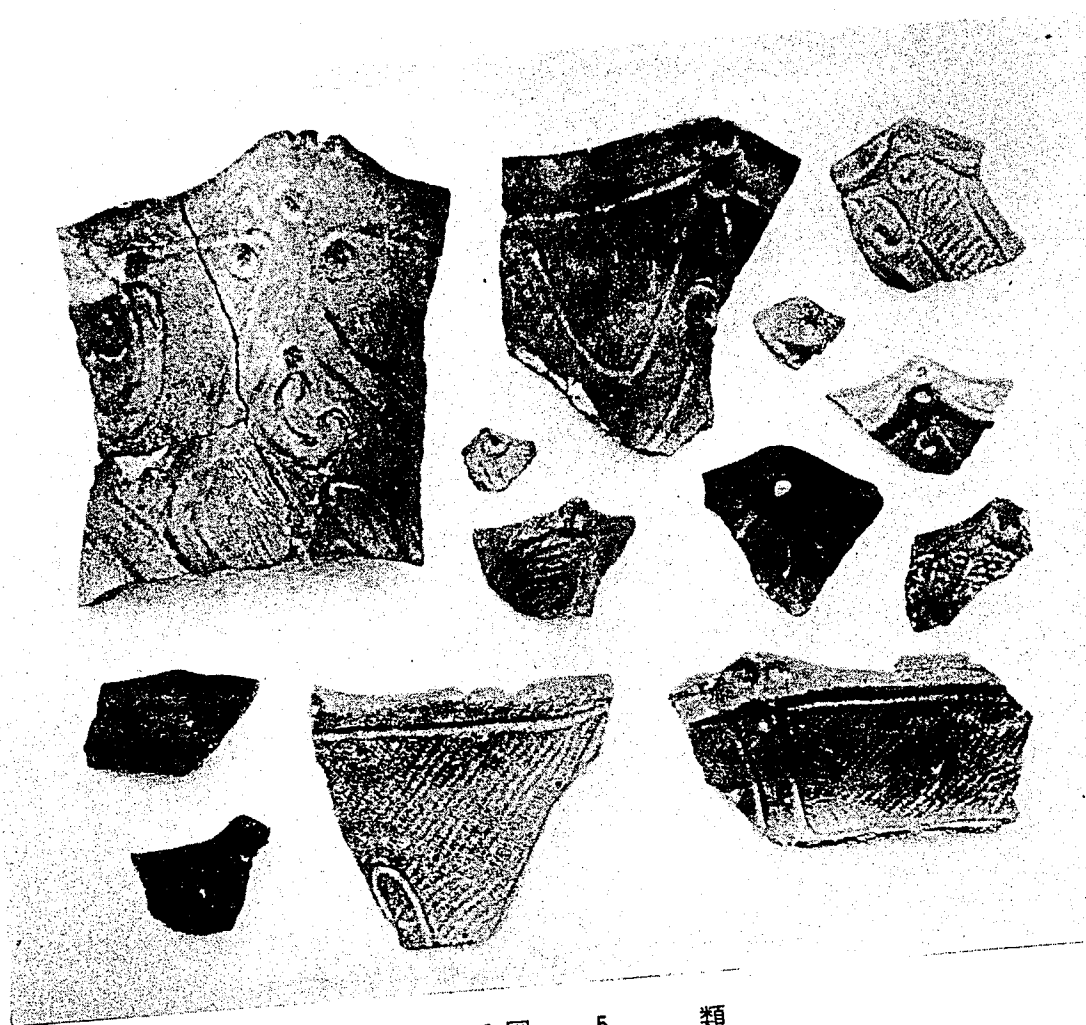
第 23 図 4 類 A



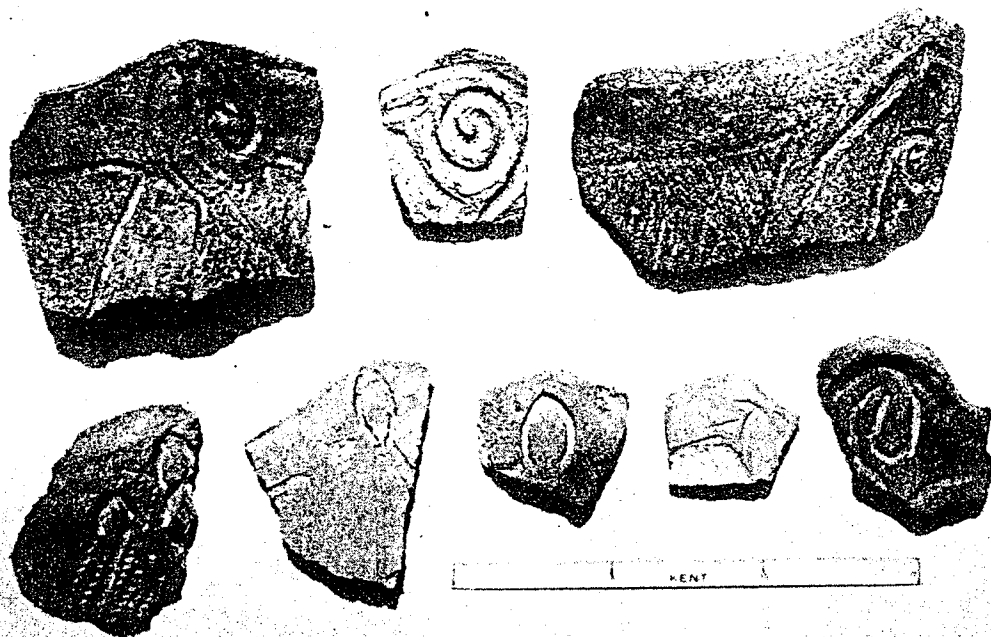
第 24 図 4 類 A



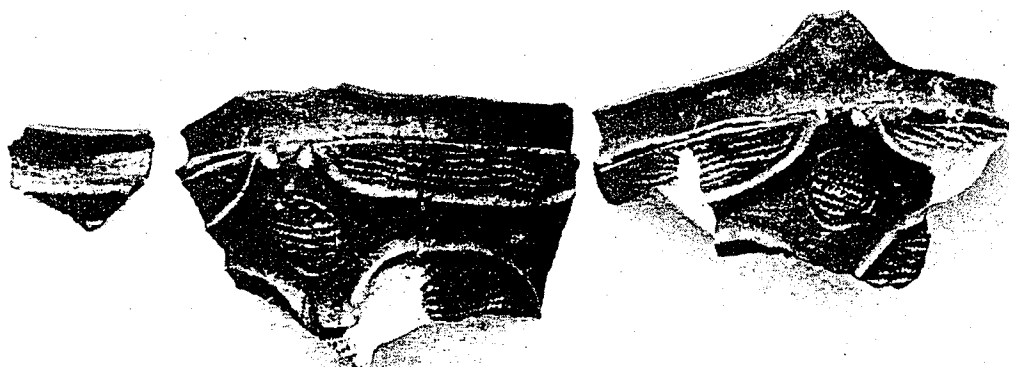
第 25 図 4 類 B



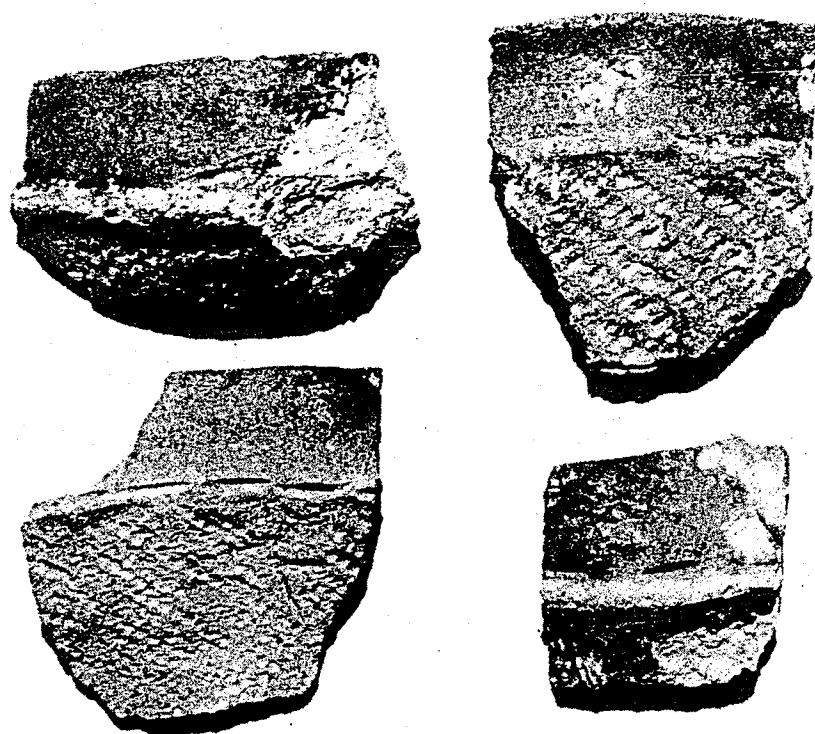
第 26 図 5 類



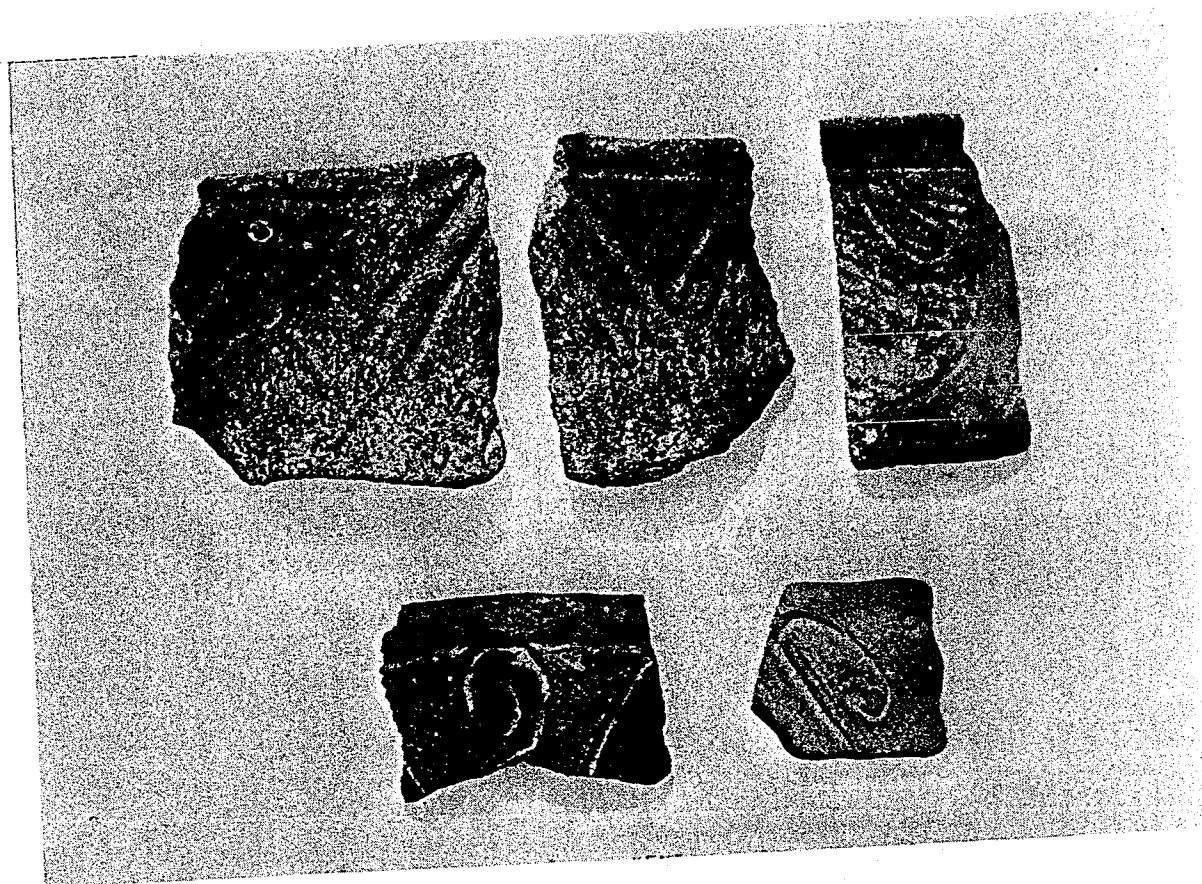
第 27 図 6 類



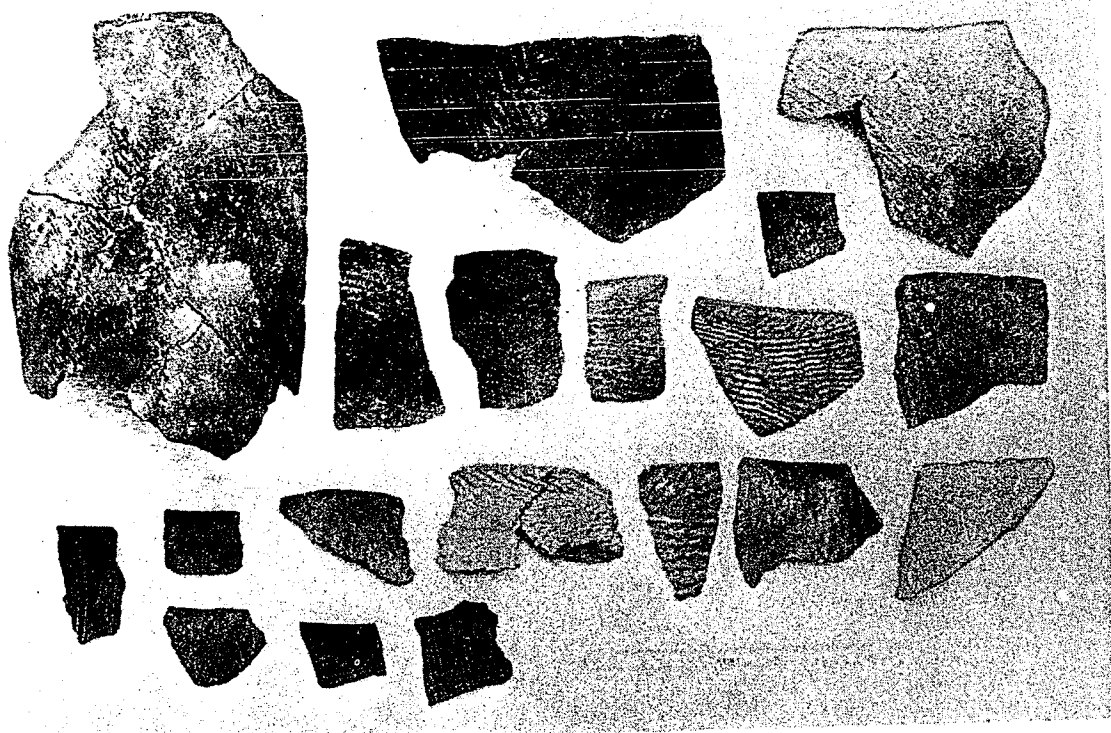
第 28 図 7 類



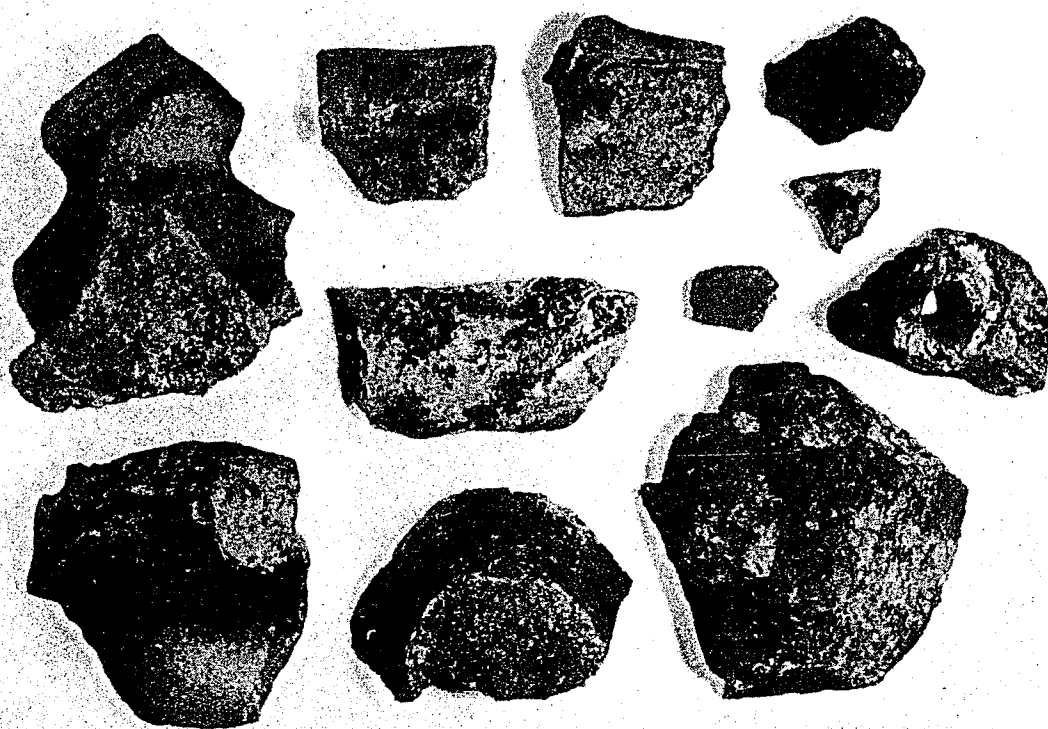
第 29 図 8 類



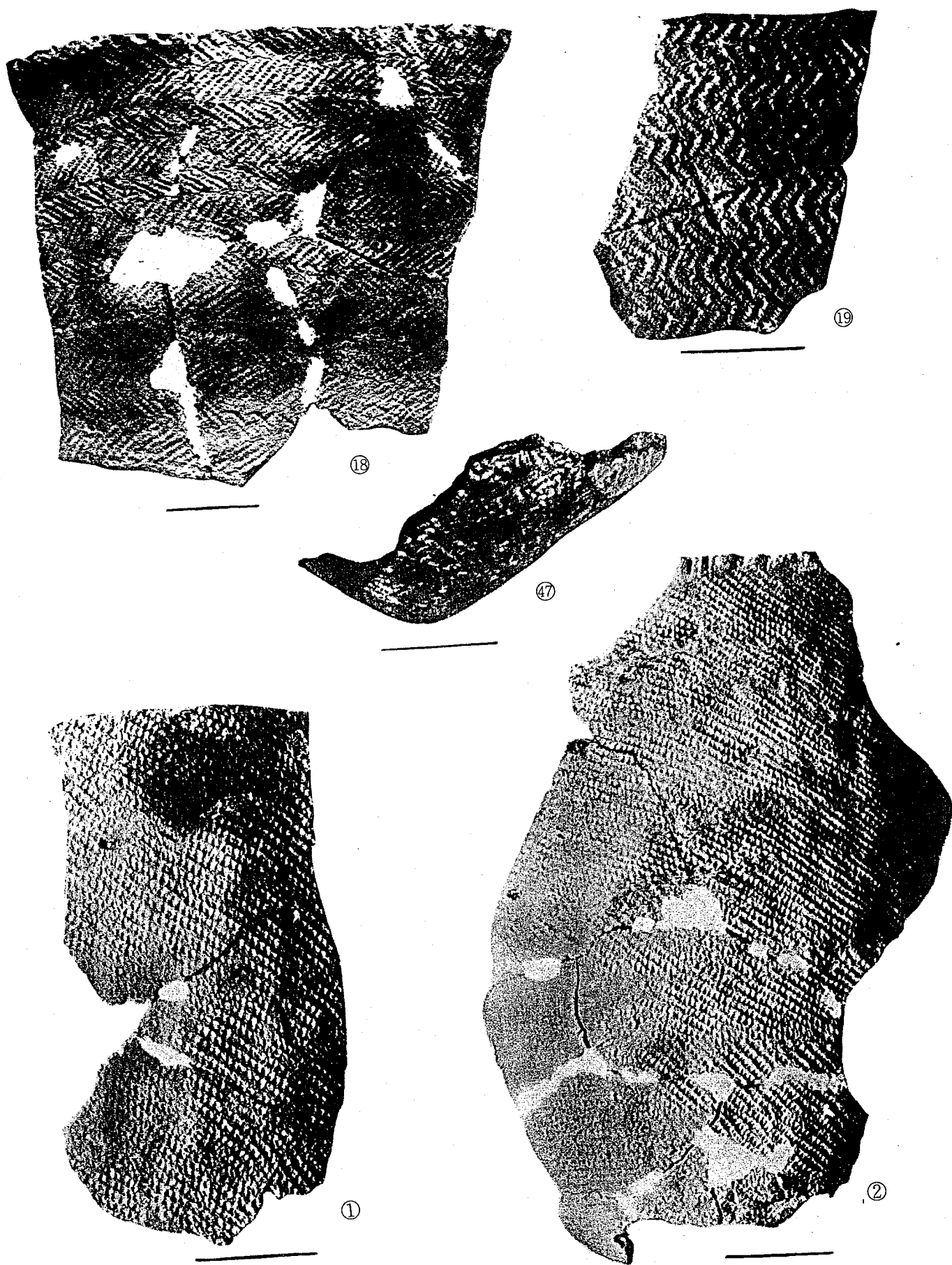
第 30 図 9 類



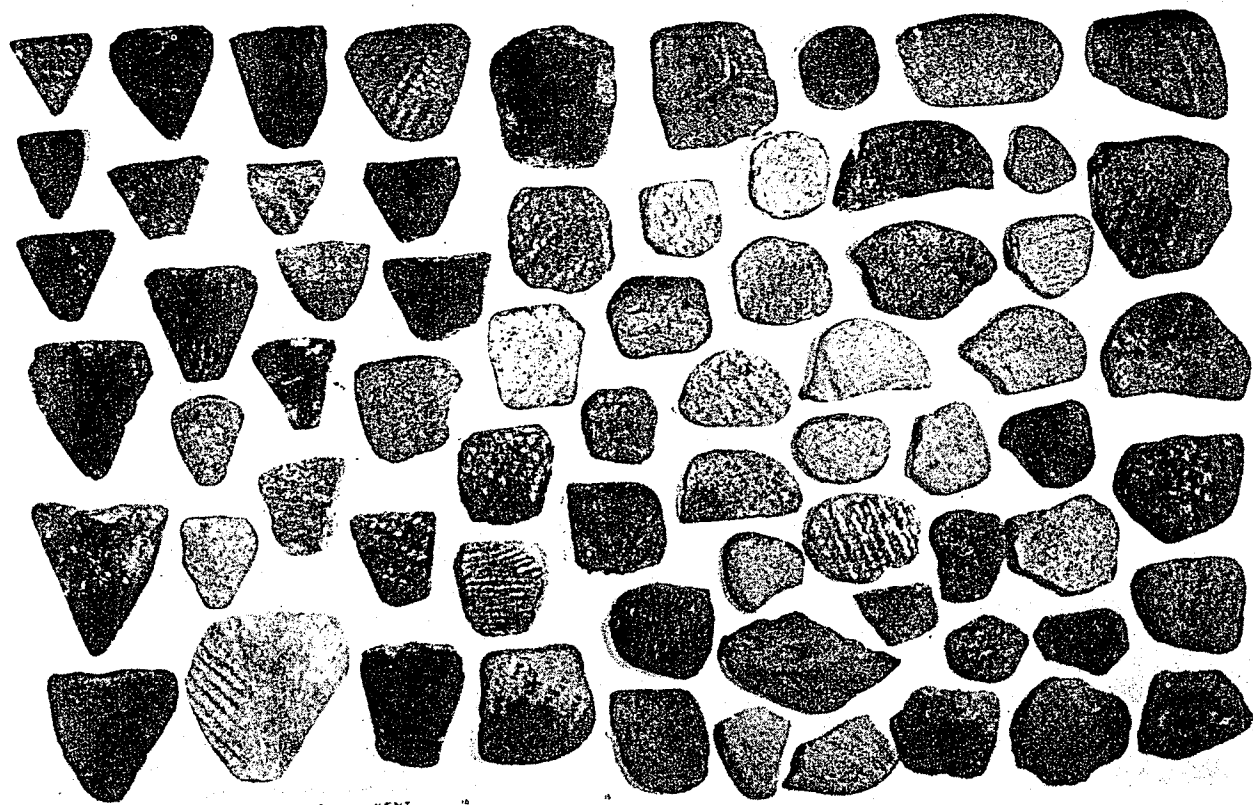
第 31 図 10 類



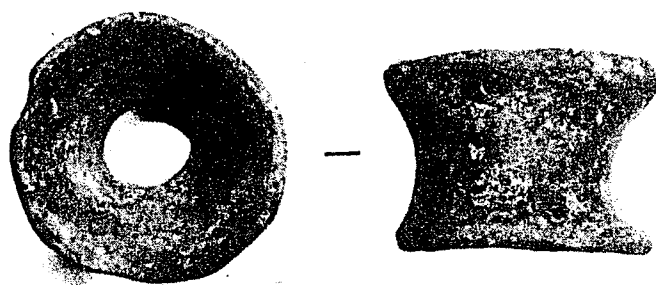
第 32 図 朱彩された土器群



第33図 縄文前期初頭の土器群(——は、5 cmを表わす)



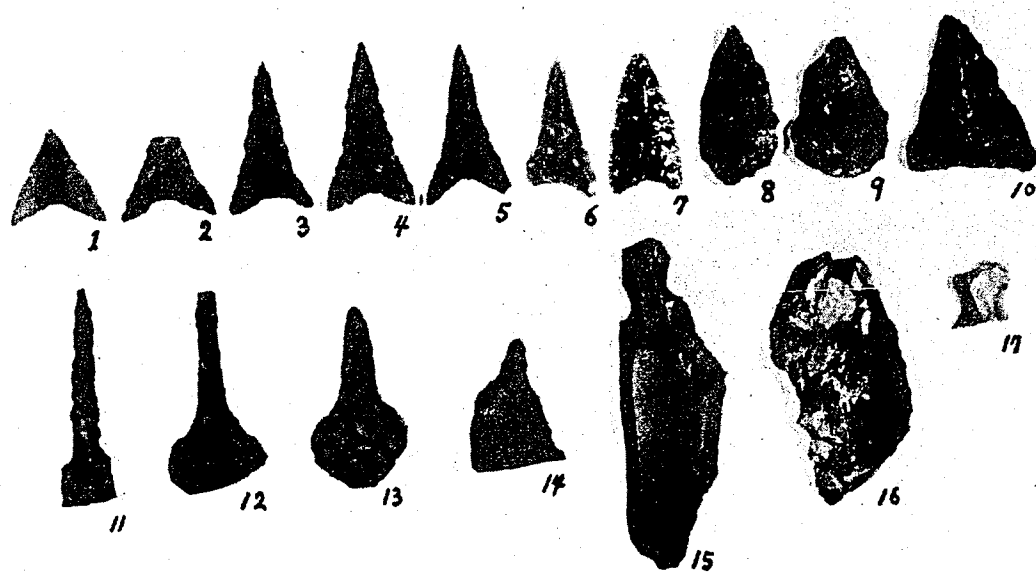
第 34 図 土器片再製土板



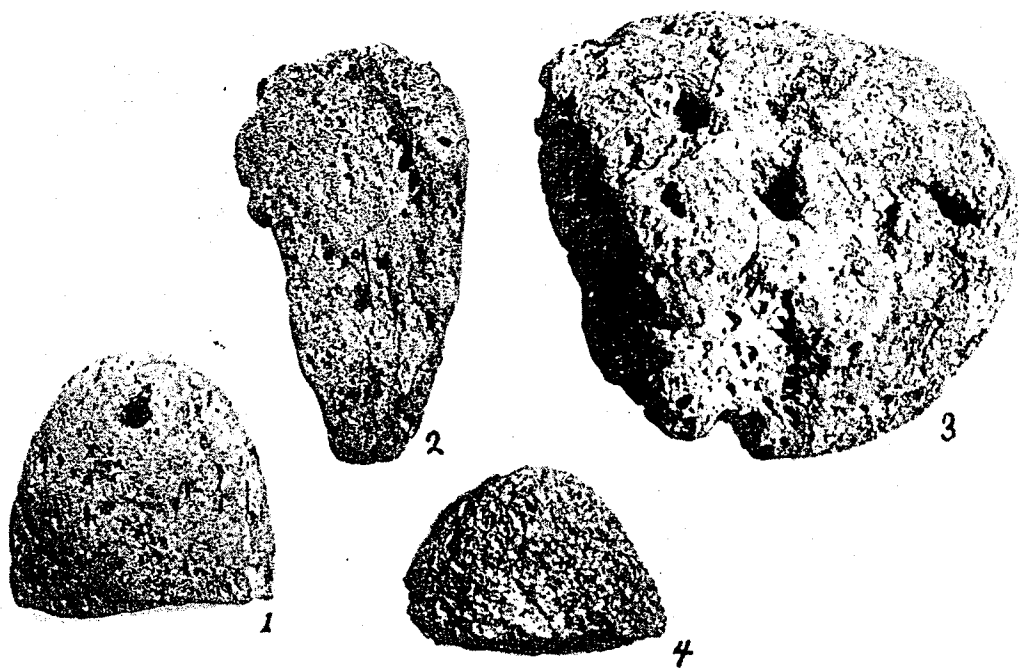
第 35 図 土製耳飾



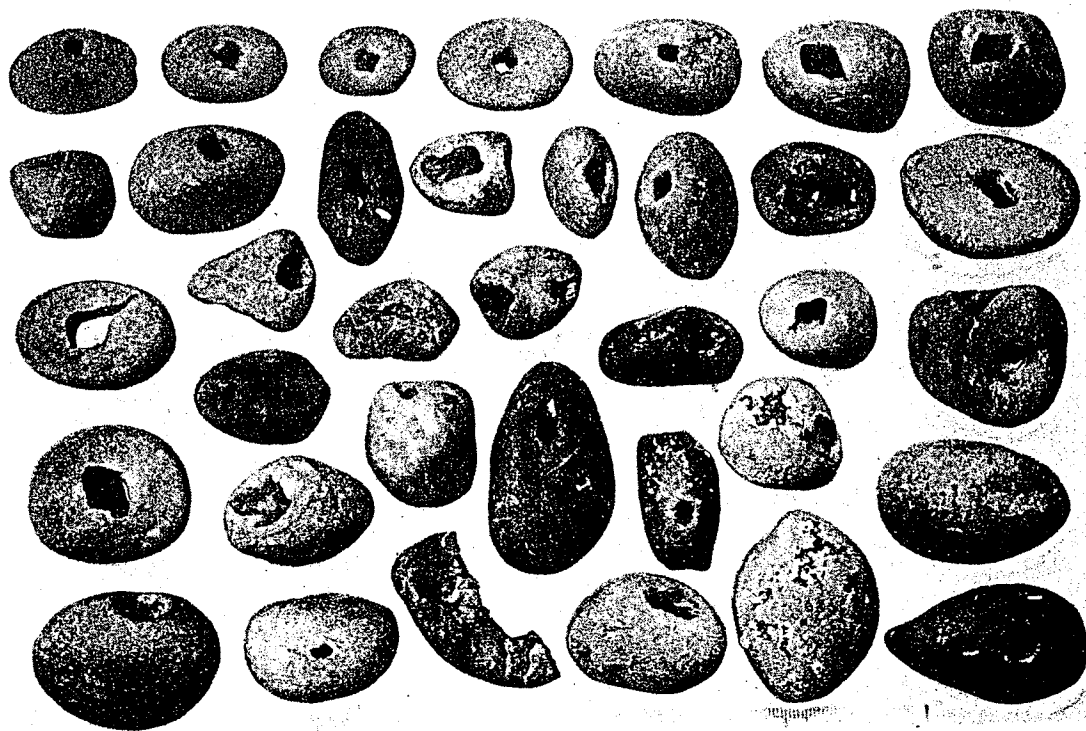
第 36 図 石 斧



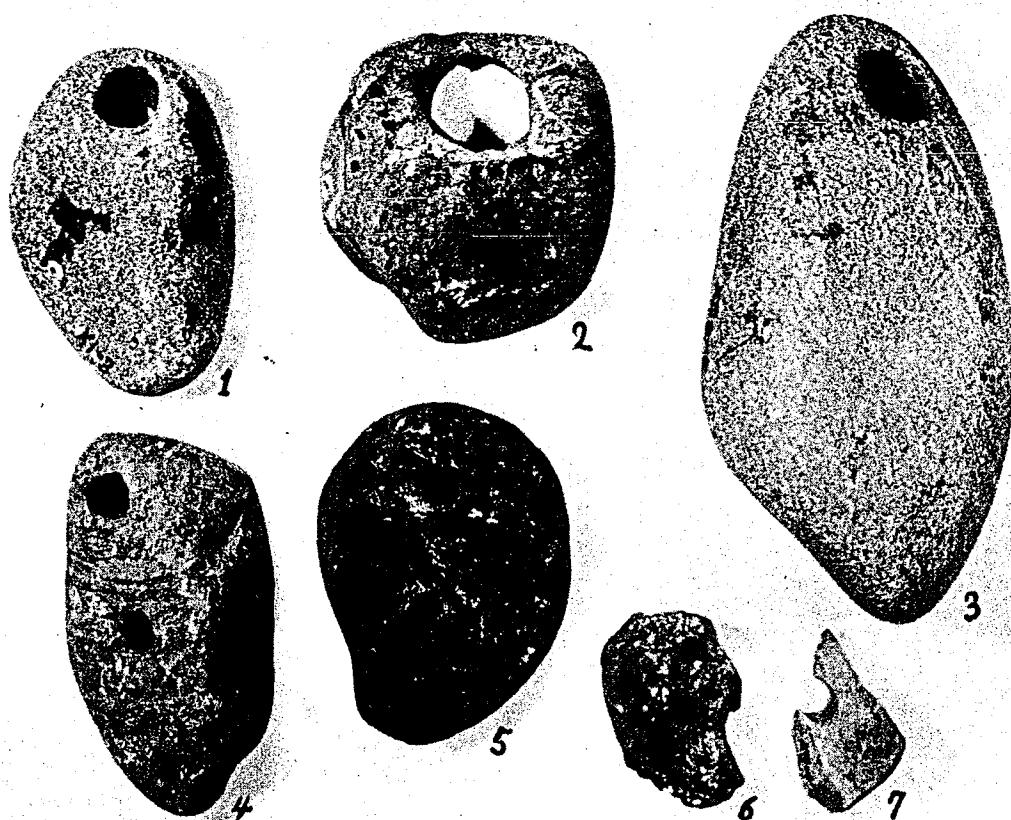
第 37 図 石 鏃・石 錐・石 匙



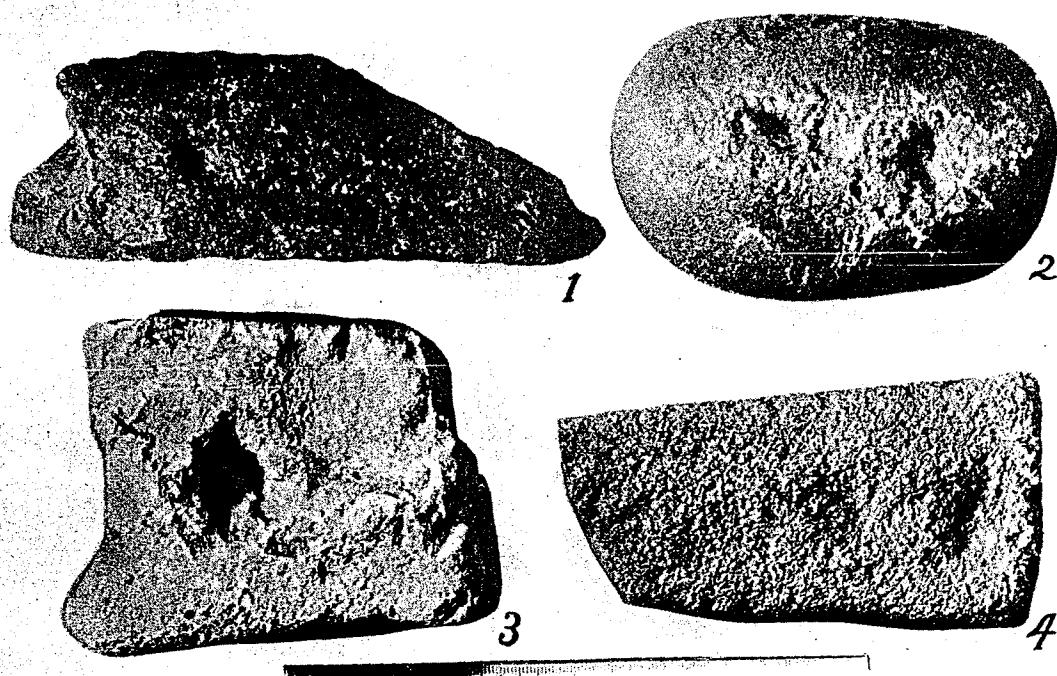
第 38 図 輕石製浮子・砥石？



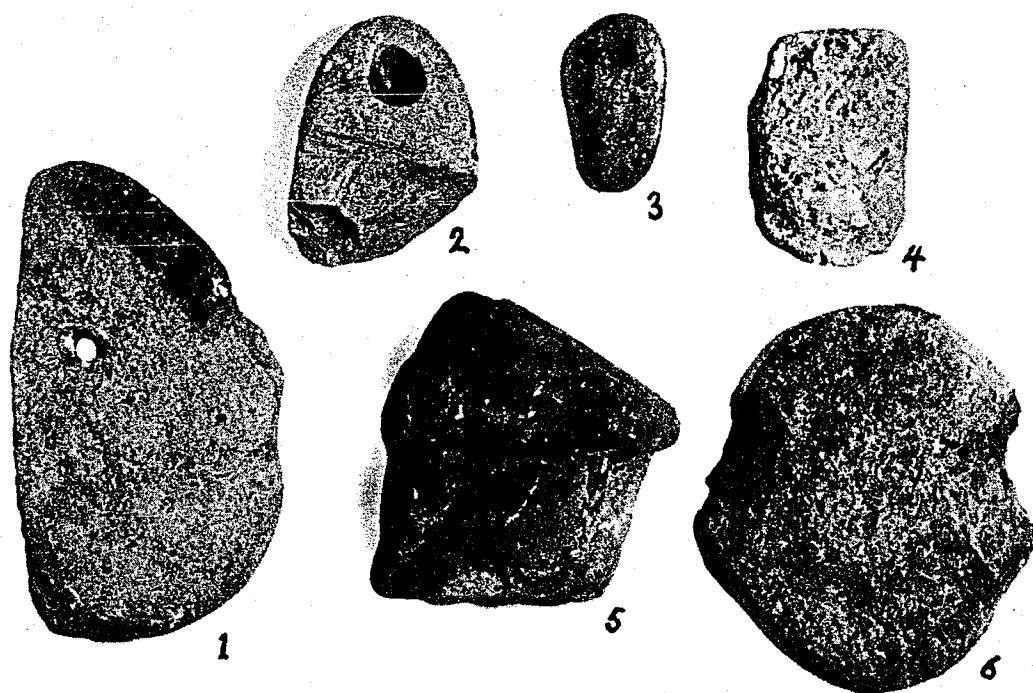
第 39 図 方 孔 石



第 40 図 円 孔 石



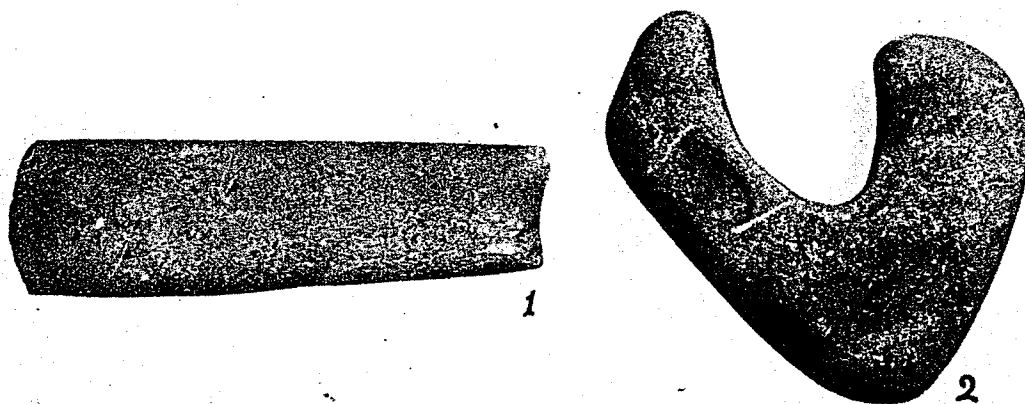
第 41 図 凹 石



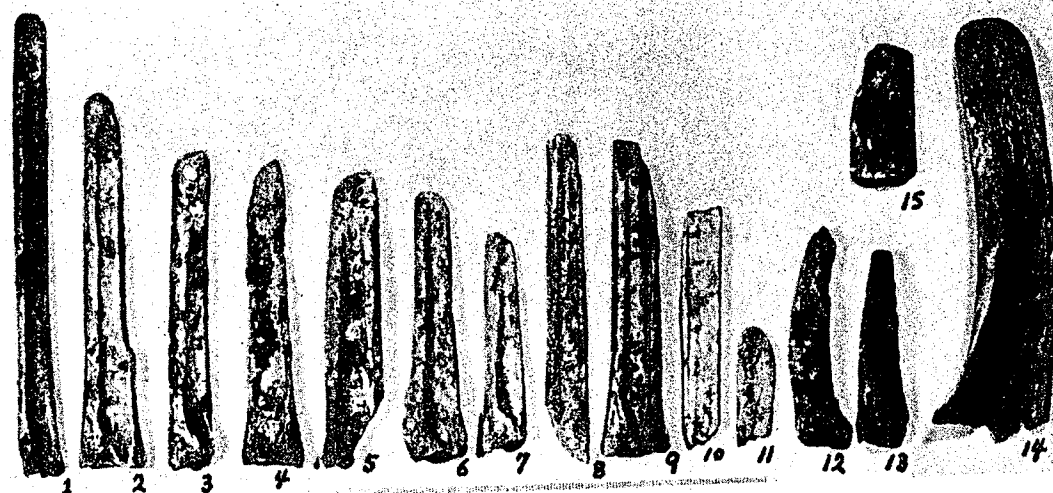
第 42 図 石棒・石製垂飾具?等



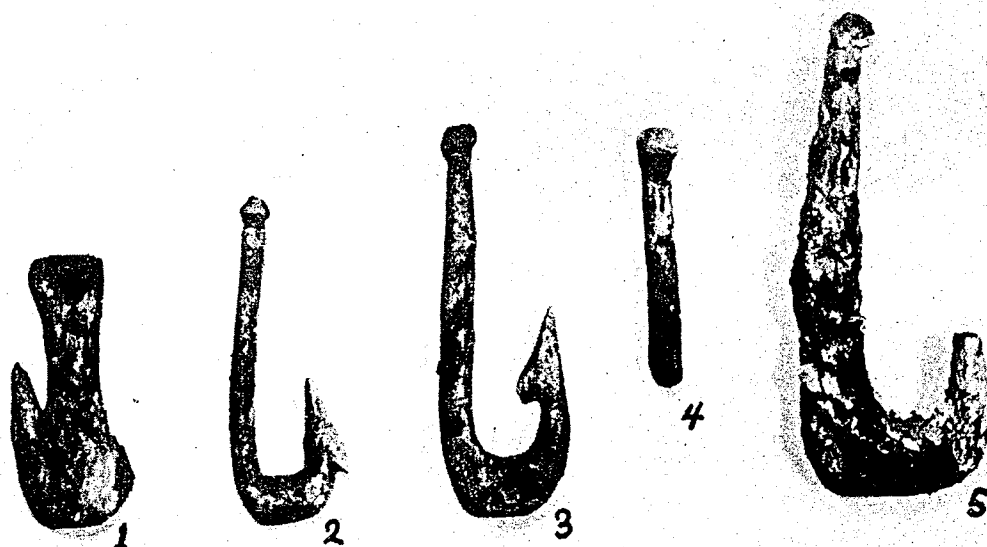
第43図 石 剣



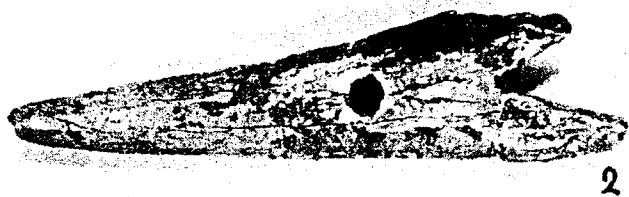
第44図 石剣破片？石錘？



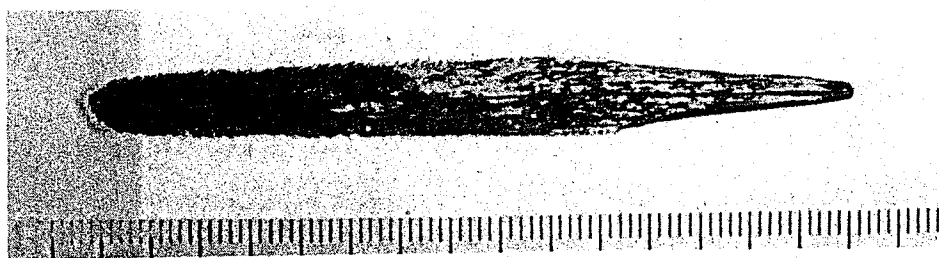
第45図 筥状骨角器・その他



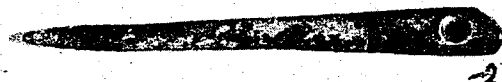
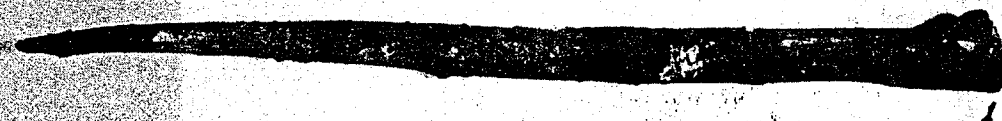
第46図 鹿角製釣針



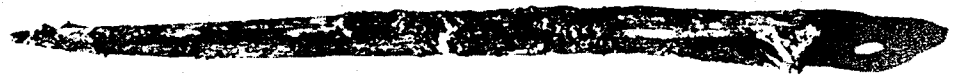
第 47 図 鹿角製銛頭



第 48 図 骨 鏃



第 49 図 骨製針・角製尖頭工具



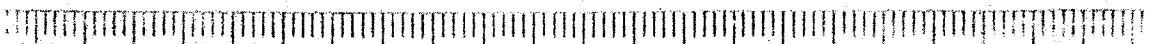
第 50 図 骨 製 針



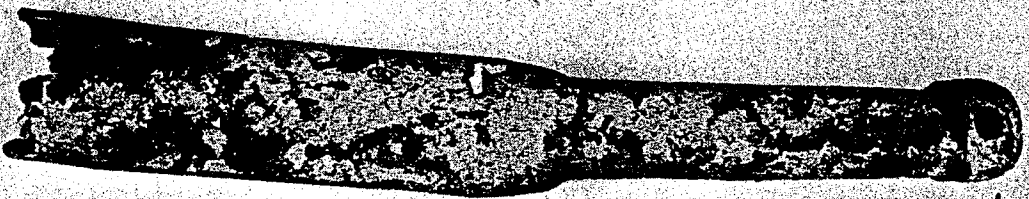
1



2



第 51 図 角 製 髮 飾 破 片
骨 製 髮 飾 破 片



1



2



3



第 52 図 骨 刀



第 53 図 骨 製 小 玉



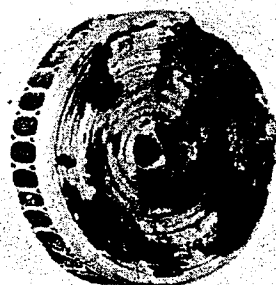
第54図 垂飾具



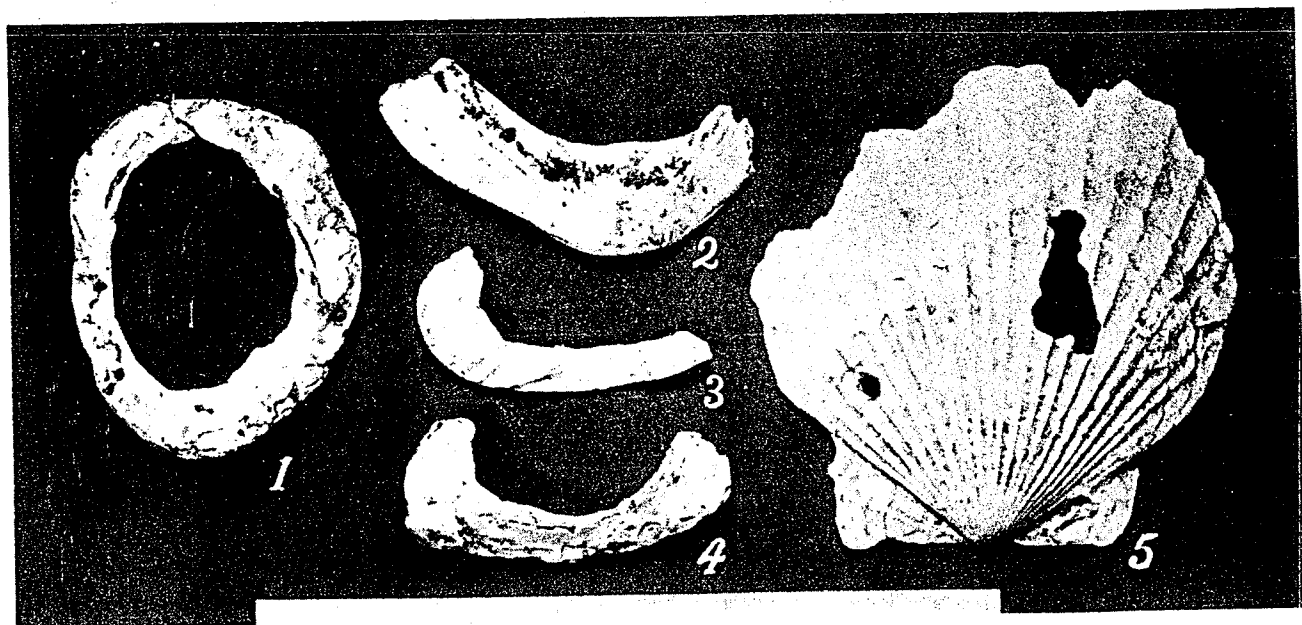
第55図 牙製装身具



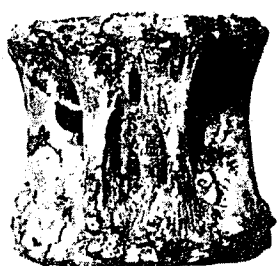
第56図 骨製耳飾？



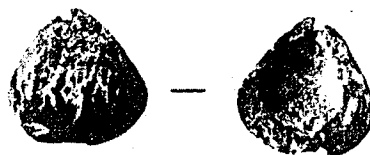
第57図 垂飾具



第 58 図 貝 輪・そ の 他



第59図 刺突痕を有するマグロ脊椎骨



第 60 図 炭化物(ウメの種?)



第61図 塊状物質 (不明)



0 1 2 cm

第62図 滑石製護符
(第二次調査概況
報告書参照)